川柳塔

昭和四十三年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十四年七月二十五日印刷
昭和五十四年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻六二七号

日川協加盟

No. 627

八月号

―54年度二賞発表句会と同人総会―

―川柳塔社主催―

日時　昭和54年10月7日（日）午後一時開場

会場　なにわ会館―大阪市天王寺区石ケ辻町三八―一（近鉄上本町六丁目から徒歩三分）―目標近鉄百貨店

（電話06・772・1441番（大代表））

▼同人総会は午後2時～3時30分。（同人総会の案内状は出しませんが役員改選等、出席者によって採決させていただきます）

▼式次第―司会・西田柳宏子―開会の辞・川村好郎―挨拶・中島生々庵〈議事〉①会計報告・若本多久志②役員改選③事業経過報告・西尾栞④質疑応答―閉会の辞・菊沢小松園。

懇親宴　同会場で4時～5時（会費三千円）同人以外の方のご出席歓迎。

▼二賞発表句会は5時50分から。

柳話　中島生々庵

路郎賞・川柳塔賞表彰

兼題　「地下鉄」　児島与呂志　選

「恩師」　橘高薫風　選

「続く」　若本多久志　選

「大声」　西尾栞　選

席題　二題と選者は当日発表（各題三句以内）

会費　五百円。

若本多久志著（喜寿・金婚記念）

川柳句文集「続・老いの坂」

中島生々庵―粉飾のにおいが少しもしない。オーバーな表現の句が一つもない。体当りの句ばかり…。

（千円・送料共）

序文　中島生々庵

選句　菊沢小松園

編集　若本多久志

発行者　若本多久志

▽本社でお取次ぎします

市場没食子・カネ女共著（千二百余句・三六〇余頁）

金婚記念川柳句集「夫婦」

目下進行中

序文　中島生々庵

編集　不二田一三夫

発行所　川柳塔社

川柳全集配本開始

第2回配本「麻生路郎」橘高薫風編

待望の書　いよいよ君臨！定価千円・送料百六十円

東京都世田谷区三軒茶屋二―十九（〒154）

構造社出版株式会社

さりげない読みの深さは名議長

死んだまねしたゴキブリの間抜面

梅雨くぐりぬけて植木屋今朝は晴れ

あられもない姿で扇風機ない楽屋

ぬれて帰る俺だけ迎えの傘がない

中島生々庵

日川協総会

6月24日大阪市中央公会堂で、日本川柳協会の第5回総会並に第三回全国川柳大会が催された。折からの酷暑であったにもかかわらず予期以上の盛会になり、午前中の総会には全国からの会員の希望、質疑応答など活潑にとり行われ、岸田万彩郎氏の司会の下にスムーズに進んだ。引き続き大会は13時50分から村田瓢太氏の司会で開始、今回新調された会旗が大きく、くっきりと浮きぼりされたように演壇の背後に飾られているのが印象的。磯野いさむ氏の力強い開会の辞から始まり、披講の順に入る頃にはさしもの大会場も熱気があふれ、やがて大会賞、大賞が決定され西尾栞氏がこれを発表すると、赤煉瓦の公会堂がゆらぐように喝采が湧く。次で颯爽と登壇した片山雲雀理事長から七ツの賞状と賞品が授与された。不敏な私が大会委員長として大過なく重任を果たし得た事は一つに永田帆船、広瀬反省両氏の寝食を忘れた、而も驚く程に緻密な膳立構成に拠るもので、どんな讃辞をならべても追いつかぬ深い感激であった。

思いは遠く来年の岡山さんの担当に走せて一層勇気つけられ、日川協の弥栄を期待するものである。

川柳塔　八月号　目次

題字・中島生々庵・表紙直原玉青

日川協総会……中島生々庵…(1)
帽　子……西尾　栞…(2)
誹風柳多留廿五篇研究……(二五丁)……(26)
入江　勇・清　博美・八木敬一・西原　亮・青木迷朗
紀内恒久・鈴木　黄・室山三柳・岡田　甫
川柳塔（同人作品）……若本多久志選…(4)
水煙抄……川村好郎選…(30)
五色墨の出現と江戸座（川柳大平記⑮）……東野大八…(24)
秀句鑑賞……（同人吟）……正本水客…(43)
……（水煙抄）……浜野奇童…(49)
愛染帖……橘高薫風選…(40)
終戦記念日に想う……島居百酒…(28)
一分間の柳論……林　葵丘…(29)

座右の句
みの虫のなんぼ匐うても壁だった　（豆秋）

私の句
花鋏母と竝んで佳い話　浜畑胡蝶

帽　子

西尾　栞

天皇もおやめになった帽子を、僕はかぶりだして十五年程になる。最初はチロルハット型の帽子だったが、段々変ってソフトの中折帽子になった、前の縁をグッと下げて、レインコートの襟を立てると、誰かがジャンギャバンと言うてくれたので、いい気になって愛用している。

軍帽の後遺症で、昭和四十年頃から前頭部の総退却許りか顱頂部が、まん円く光彩を放ってきたので愈々帽子をはなせなくなった。そして帽子は僕の顔の一部となった、それで帽子と眼鏡と髭が僕のトレードマークになっている。

カリカチュアー帽子と髭で出来上り

昭和四十九年、ハワイへ行った時に革のハンチングを購うた。鳥打帽は人相が悪く見えるからと敬遠していたが、鳥打帽は鳥打帽なりに又、リラックスした雰囲気を作ってくれる。それ許りか年を十歳も若く見てくれる。この間、僕のハンチング姿を見て、部長刑事の芦田伸介にそっくりだと言うてくれた人がいる。だから目下盛んに鳥打帽を愛用してい

第三回 全日本川柳大会記……西尾栞…(38)
句集「地下鉄」私見……高杉鬼遊…(44)
「続・老いの坂」発刊記念句会……菊沢小松園…(44)
雅号ぶっちゃけばなし……不二田一三夫…(56)
初歩教室……板尾岳人…(56)
大萬川柳「捨身」……松本忠三…(73)
柳界展望……本田恵二朗…(50)
本社七月句会……川村好郎選…(52)
各地柳壇(佳句地10選)……(庸佑・整理)…(58)
課題吟「ソーメン」……新岡回天子選…(75)
「氷」……祥月・一三夫共選…(54)
一路集「ハト派」……渡辺菩句選…(46)
「ルーツ」……大矢十郎選…(46)
編集後記……森下愛論選…(47)
……(一三夫・葉子)…(81)

座右の句

天職として停年にこだわらず　(茗人)

私の句

倖せは自分の顔で生きる日々　林露杖

そうそう、西いわをさんのお通夜に行った時周章てて、バスにとび乗った。鳥打帽を脱いで汗を入れていると、後から三十歳余りの男が僕の肩を叩いて、

「おいッ！人の靴を踏んどいて黙っている奴があるか！」「僕、踏んだか」「踏んどきゃがって何ぬかしやがる」「そりや、すまんかったなァ」「すまんかったで、すむか、おまえどこまで乗るんじゃい」「藤井寺迄や」

之はえらい事になった。藤井寺で下りたら勝負せんならんと思うて、鳥打帽を真深にきて、席を立つと案外相手は小さい男であった。間もなく藤井寺が二つ程の停留所で、男は、「よう、おぼえとけ！」と捨台詞を残して下りた。僕を部長刑事と間違えたのかも知れない。

帽子の効用は、今更喋々するのもおかしいが、冬は暖かいし、夏は涼しい。少々の雨でも無帽の人のようにあわてない。

爾来、僕は帽子道楽になって、パナマ帽が四ヶ、中折帽が五ヶ、鳥打帽が三ヶ、ベレー帽が二ヶある。そして外に白いゴルフ帽が一ヶあった。そのゴルフ帽の正面に、

一歩いずれば我旅人となる心

という一句を書いていた。

或る日、関西線の八尾と久宝寺の間で窓外に映える綺麗な残照を見ていると、折柄の風で、この帽子を飛ばしてしまった。

残照や帽子にあった旅心

川柳塔

若本多久志選

感謝して慕う心に幸を知る
親心子心一つになる我が家
焦るだけ無情の針の時刻む
未来像抱いて男の築く夢
明日開く花が楽しい老夫婦
引揚げて築いた家があたたかい

倉吉市　奥谷弘朗

型破り男の味を持ちすぎる
質の悪い女を中年として好む
ありがたい母へ感謝が口に出ず
髭生えて母を離れる時が来る
主役にはなれぬパセリに青がある
ブラウスが緑　青葉の友になる

兵庫県　遠山可住

ご免よが今晩も言えぬ夜のしじま
板前が包んでくれた鯛の粗

竹原市　山内静水

子離れをすると貴男にやける世話
どう見ても仮縫ン万円には見えず
みそめられみそめて嫁ぐ日の鏡
座布団を拝辞言わせてもらいます

藤井寺市　児島与呂志

山々は夢ありそうに夕暮れる
ラーメンで済ませる昼餉の孤独感
不幸には不幸の顔で出会えない
信じ合う手段むなしい嘘をつく
閃光が女の心をまた替える

桜井市　岩本雀踊子

盃を伏せた男に意地がある
ある日男自分を試して見たくなる
何もかも知ってる父の背がある
給料袋の封を切る妻にある笑顔
うたぐりを持ってる女の生返事

出雲市　原独仙

痩せ細る老軀薄着の夏が来た
掛軸も鮎・鯉あるじ漁が好き
見晴しの利く宅地だが墓地の跡
ユーモアに溶け長生きの性という
両の手を原動力に車椅子

伊丹市　樫谷寿馬

故里で逢うた寮歌が美酒にする
摺りガラスのボトル冷酒のシルエット
氷片も無口に揺れるハイボール
暑気異変ビール天地へ迸る
ジプシーの唄に眠るかぶどうざけ

倉敷市　藤井春日

ポックリさん詣り息子夫婦は知っていず
澄み切った瞳へ嘘を云いそびれ
枯花を見るたび故郷の老母思う
高齢者立派な履歴も拾われず
煩悩を断って雪月花すばらしい

西宮市　島居百酒

鮭に似た回帰故郷の水温くし
香煙にありし日揺らぐ黒枠
征服をされても霊峰揺がない
鍵束の輪には嵌めない鍵を持ち
献本で褒められ書店で売れ残り

尼崎市　黒川紫香

バランスがとれない足を意識する
栄転か左遷かひとり飲んで酔い
のんびりと牛蝶々の話聞く
祖谷渓に民宿ポツンとこぼれそう
番人が渡れますかとかずら橋

高槻市　若柳潮花

銀の鞍置ける駱駝にした女
恋のない男へハイビスカスの赤
屋上の風にビールの泡がとぶ
若い血が呼び合うあれた日のザイル
飴なめて男バイブル読んでいる

富田林市　岩田美代

瞳の澄んだ人と出逢えり古都しぐれ
それぞれに五百羅漢も業持てり
梅の壺三つならべて満ち足りる
消しゴムで消えたと思うてるエゴイズム

西いわを先生悼む

合掌にひと刻聞ゆ師の譜線

大阪市　中川滋雀

児島与呂志氏句集刊行

地下鉄の朽ちぬ響が詩にのる
掌を合わすお蔭さまでが嘘になり
不動真言　心を燃やす糧にする
つん読の棚から見栄がこぼれ落ち
働き蜂蜜の甘さは知らずとも

倉敷市　水粉千翁

汗拭いてここにはここの風に触れ
心の扉開けて抱擁力あわれ
紫陽花の窓まぼろしの片えくぼ
ふた心あっても継木根を信じ
遙かなる道の広さを信じたし

倉敷市　野田素身郎

白鳥の雨にうたれて思案顔
むつかしい話はよそうよ二日酔
軽蔑していた父とおんなじ職に就き
どこに傘忘れてきたか梅雨に入り
省エネに順応できる戦中派

島根県　小砂白汀

本読めぬことも貧しきもののうち
真実を求め過ぎたか凍魚の目
颯爽と巫女神庭を大股で
期待され過ぎガードレールを突き破り
煌々と照る月知らぬ石の裏

鳥取市　河村日満

年金に高嶺の花の伊予絣
戦国の匂いただよう天守閣
肩組んだバックに遠く讃岐富士
屋島から海が遠のく壇の浦
源平の旗を瞼に待つ夕陽

大阪市　川口弘生

子育てを知らぬ女の潔癖さ
この町は自分の町という郷愁
マイホーム紐の長さにしばられる
闘病の甘味へきびしい舌となる
父寿超えて父も若かったなと思う

青森市　工藤甲吉

天皇のお田植え姿親しまれ
葦切が休耕田を悲しませ
かたちばかりが生きているむなしさよ
ふるさとへ帰り少年にもかえり
鼻声に平常心を乱される

鳥取県　鈴木村諷子

胸像の厳父にジッと見つめられ
毒舌がまだ健在なりと言う
墓碑銘も刻み自分の墓を建て
砂に寝て太陽熱だ臍よ吸え
父の職なんか継がさぬ父の夢

和歌山市　垂井千寿子

嫁った娘を客あつかいにして淋し
時には人形になる楽しさよ
風紋をちょっと変えてみたい年齢
いつの間に手綱はずした子と知らず
残り香が気になる女客帰り

川西市　戸田古方

帽子かぶれば幸い禿がかくせます
スケッチでっせと句想ひねってみる車中

読まな損みたいに開く満員車
スキンシップやいうて甘えてみましても
ニュースバリュー感が駄目だといい切った

竹原市　時広一路

ネジ巻けば歩巾大きくなって来た
潮満ちて引いて心が揺れ動く
これくらい磨けば落ちる錆であり
父として男としての肩を張る
栗色の髪ひるがえす大ジョッキ

堺市　藤井一二三

川柳塔・四国の旅（二句）

つむぐ手に命もやして伊予なまり
四国路を揃う白衣の遍路笠
満ち足りた汗を夕陽に向いて拭く
退職の決意妻の手とる夜更け
再出発のレールへ靴の紐を締め

富田林市　和田維久子

座して祈る人並みの生活にある重さ
信号は赤　やがては青に変る日も
落着いて来たのか男の謝辞を聞く
ほんの一言人生変えた袖の香よ
地にかえる花の色香の永しえに

西宮市　若林草右

青だけで渡りきれない老の杖
木炭車またお出ましの世を憂う
古里へ運ぶ笑顔は天皇杯
寝袋へ余生をつめる雲の峰
首切り足切り親子に苦難の道たえず

和歌山市　野村太茂津

滾々と石油不足へ湧く清水
もやもやの世界確かにめしを食う
熱い茶で足りる男の澄んだ汗
海泳ぐようにはいかぬ世を泳ぎ
筆勢に打たれて偲ぶ亡父の跡

岡山県　嘉数千代香

露路裏の善意が三面記事へ咲く
夫の帆を繕ろう針が錆びてくる
頂点の風は冷たいものと知る
泣きに来て山のこころに裁かれる
これしきの善意へペタルの軽い音

島根県　西村早苗

郭公のかすかに遠き旅鞄
北からの旅のこけしに切手はる
鍵っ子の口に夕焼けの唄がない
夜ならば殺すくもなり朝を這う
拒まれて肩にくい込む荷をからめ

今治市　越智一水

約束を違え素顔を見てしまい
幸せな暮らしで愛を見失ない
テレビでの釣りは大物ばかり見せ

逢いにゆくうれしさ袖に風通す
出稼ぎの夫が帰える薄化粧

兵庫県　北山越山

すぐ消える虹なら追わぬ知恵が出来
何時鬼になるかも知れぬ世辞とみる
嘘のない膳で夫婦の箸揃う
音痴でも妻が唄っているなごみ
蓑虫よ折れない枝にぶらさがれ

泉佐野市　阿萬萬的

旧街道の松はボソボソひとり言
丹波路の松には丹波の風のうた
滝の飛沫のリズムに松の枝揺れる
林間暮色まだ眠らない水の白
石仏も初夏ニンマリと影が出来

西宮市　藤村〆女

源平を偲ぶ屋島は霧に濡れ
ロマンスグレーの舌さわやかにとぶジョーク
白い足女の業か座りだこ
追い風に帆かけて走る母の夢
太陽がイッパイブランコの子と歌う

東大阪市　竹中綾女

バスガイドの声うるさくなって来たねむ気
備前焼の素朴さ気に入り湯呑買う
忙しさ作って淋しさ堪えている
お料理にはずみをつける孫が来る
磨崖仏バスから拝む大野路

倉敷市　田垣方大

虫の羽根プラカードめき蟻の列
人間を翻弄してる棒グラフ
社長室行かぬうちから汗になり
瞬きは札を数える時しない
返盃をする手に心のぞかれる

和歌山市　津田与史

続々と生れ　続々と死なず
人生のあしたは描けぬむつかしさ
万緑を逃げて老眼鏡を拭く
わが家狭しのんびり構え叱られる
目に見えぬ紐で人間動かされ

岸和田市　高橋操子

流行よりかいこの絹を売るのれん
ふるさとはまだ唄があり手で植える
ふるさとは帛紗大事に受けつがれ
ふるさとは文化に遠く夢を持ち
開発はいやふるさとの気が揃う

岸和田市　古野ひで

ハワイ旅行（二句）

ふれあえる心嬉しい原地人
魅了する琥珀の肌のプロポーション
ふりむけば重たい過去がついて来る
満開の花にはかなさ見てしまい

梵鐘の余音の彼方へ今日は消え

倉敷市　藤原桜山

しあわせな歩巾は変えぬかたつむり
燃ゆる愛冷たい活字となって果て
飛んで灯に入らねばならぬ虫がいる
抵抗のはかなさ刻む万歩計
人の道説いてたじろぐものがあり

京都市　都倉求芽

本人は嘘以上の肚を決め
夕映えの色紙に墨が燃えている
雨止んであじさい次の色考える
蛙また菖蒲のぞきに浮いてくる
タンクトップ肩甲骨で風を切り

岡山県　出原敬一

在りし部屋に父の句父の忌が巡る
お返しする草刈機の癖言わずおく
熱の子の嘘が砂場へ落ちている
やりくりの妻に内緒で青磁とあい
咳払いそれは買うなの信号か

岸和田市　福浦勝晴

人生はグラフのような浮き沈み
西鶴と芭蕉の歳を十も越し
老いの坂失業保険で中休み
回想もほどほど手繰れば切りがない
噛み合わぬサラの入れ歯にやきもきし

大阪市　本間満津子

蜘蛛の糸みなそうなのですお釈迦さま
憎まれてもいい三猿では佗びしゅうて
歩道橋いつも不平を聞くばかり
盲もよし瞼の人は若いまま
夏が来て島は都会の彩になり

米子市　八木千代

ねぎらいの嘘と知りつつ耳は酔い
心外な言葉を耐えた耳を撫で
病棟に祈りのこもる灯が並び
話題ふと途切れて夫婦雨を聞く
使いたくない切札も持って出る

島根県　堀江正朗

白杖もはずむ嬉しい旅に出る
もの言えば涙が邪魔な嬉しい日
手さぐりの見られて佗し恥おおし
眠られぬとき想像の国にいる
留守番の佗しさ老いの独りごと

宝塚市　傍島静馬

辞書傍に筆まめ当て字を恐れてる
合掌の手から邪念が透けている
反駁を許さぬ撒餌が利いている
陽は西にオフィスに生気甦り
コレステロール心配するほど食べていず

泉大津市　村上春巳

ナメクジへ憎さの嵩で塩を盛り
さあ来いと省エネルック身構える
気持ちよく飲んでくれてる飲まし甲斐
いい汗をかいたビールの通りよう
師の句碑へ貴男の好きなお酒です

和歌山市　若宮武雄

ひとりぼち自分の歪見て飽かず
信じ合う日には確かに見た絆
石ころがごろごろ石に躓かず
男には乳房の重み謎のまま
九輪の光は高い高い空

米子市　佐伯越子

再起する少年の歩巾大きかり
新緑の古寺に遍路の心和み
ひげ付けて踊るピエロの胸悲し
靄深き合掌の尼僧影きびし
雉子鳴く亡母の眠る地静まりて

松江市　小林孤呂二

故里は青のさびしさ未だ残し
人間は数に驕れる癖を持ち
自重しているのに悪友離さない
器量よし味よし鮎を追いかける
判ひとつ貰うみじめさ噛みしめる

鳥取県　林露杖

躑躅散りガーベラの朱蘇る
あの馳今日は会釈をしたようで
さり気ない心づかいが嬉しくて
満を持す心の底にある焦り
ソフトムード女心の紐を解く

西宮市　杉浦婦美子

髪いじる所作に女がまだ残り
いい事もあるさと枕に言いきかす
ぐみ熟れて幼き日々がひた恋し
バラの匂い胸にくるよないい知らせ
ぎりぎりで許した母の背がまるい

美祢市　安平次弘道

未来図へ運命線は妥協せず
主義持った男旗色気にかけず
献血をして健康に感謝する
犯罪の手口ドラマに罪ありや
言い勝って心の隅が重くなる

米子市　林瑞枝

流行へも一度着る気の裁ち鋏
ひとこまの想い出胸に生きる倖
花愛でる目は人傷つける目ではなく
ストレスへ友訪う気の紅を刷き
未知数の夫へロマンの灯を消さず

八尾市　高杉鬼遊

集金をする方でなし痩せている
人間が怖くて檻の中にいる

バラ色と云う人生を誰も見ず
善人の無力を嗤う五億円
八月の仏に水を忘れるな

和歌山市　松原寿子

あなた恋い逢わず忘れず抱く温み
紫陽花の雨が慕情を深くする
さりげなく波は深みへ思うまま
以心伝心素顔の奥に炎えるもの
憧れは女の芯に棲むあなた

竹原市　森井菁居

農民の詩集は非売品でよい
風ぐ海へうっぷんなんか捨てられぬ
スクラップブックに本音がうずくまる
四面楚歌ちゃちな思想が風化する
仮面はずしてふるさとの駅に降り

竹原市　古谷節夫

寝言にもテレビを見てる子の様子
発車ベル何時もの顔が朝を出る
坂道で親子の呼吸ぴたり合い
乾杯の音頭に夢が盛ってあり
優勝旗汗と涙の私語聞こえ

玉野市　小谷仙山

朝の道お早うさんと鬼薊
ごくりごくり麦茶が美味い喉仏
百万の味方故郷に山河有り

贅沢がこんどは麦飯べたがる
お互いの腹さぐり合う酒の味

大阪市　神夏磯道子

親をみる約束手形持ったまま
息抜きのお茶は夫が入れてくれ
豊かさが皮肉な心読みとれず
潤滑油僕の体を休ませず
石庭の心解けぬまま京の旅

大阪市　金井文秋

コンピューター直感力は持っていず
酒と云う味方が男駄目にする
あきらめの年代となり夢追わず
メカニズムについて行けない老いを知る
板前の庖丁リズム狂わない

八尾市　宮西弥生

翔んでいる女で戦の外にいる
生活のリズム狂わすもの忘れ
悔いのない未来へ主義を一つもつ
便箋の白さへ告白まだ書けず
六月の雨煮つまってくる決意

竹原市　小島蘭幸

赤ん坊の視線鋭いものをもつ
ミルク代だけ赤字が続く子の笑顔
吾子ねむるねむるちっちゃなにぎりこぶし
ごめんごめんお父さんに似て生まれ

振り向けば妻振り向けば吾子がいる

大阪市　本多柳志

新聞の隅へ巨星が一つ落ち
勇ましくやがて悲しい軍歌集
篤農の意地か都心にある青田

四国吟行

坊っちゃん湯マドンナらしいのも見えず
漱石も子規も生きてるバスガイド

八尾市　香川酔々

句碑に子規絣の里の百日紅
伊予絣つむぐ娘清し衣がえ
マドンナの行水憶う道後坂
夕風の屋島の狸なお灼けて
滴って香煙揺れる穴地蔵

八尾市　高橋夕花

ミキサーにかけて出直し考える
甘い日も苦い日もあり朝の水
つき纏うほむら妻です女です
やさしすぎる夫の今日を信じとく
君がため子のため私の今日終る

新宮市　大矢十郎

小走しりで私も兎小屋を出る
結ばれて地下足袋で出るいい夫婦
揚げにくい国旗どうしたもんやろか
離れないはなさぬ恋へ蚊が攻める

もの言えば金要る話四女五女

和歌山市　西山幸

泣きたくて泣けぬ瞳に雲白すぎる
信じてはいても呟きたい鈴で
どしゃ降りの郵便受けに善意着く
母のうた綴れば遠く海が鳴る
許す瞳になりにんげんの顔になる

和歌山市　浦野和子

足跡を追えば無常の風が消す
人形の女らしさに嘘が無い
二次元の世界で恋は醗酵す
距離置いてじっと見守る愛もある
七合目あたりで締める靴の紐

諫早市　原田明春

歳月の割りに重みのない年金
ベテランと言われ左遷の地に置かれ
薄く着て女の魅力を見せる夏
ガリ勉の灯だけがとぼる団地窓
古靴の寿命ボーナス迄のばし

姫路市　植村客遊子

ご命日テープレコーダかけておく
銭ためて冷たい奴になりさがり
転勤の辞令こんども東向き
よろめきの余りで生きてるような日々
独身で居て転勤も苦にならず

大阪市　西田柳宏子

どっち向いてもチョボチョボ背伸び止めとこう
入院を天与の休みとして素直
点滴を見凝め生命を考える
うら若き女医を血管逃げ廻り
退院の働き蜂に還る朝

富田林市　板尾岳人

山男一人住んでる武家屋敷
南瓜の種をもらった山男
帽子屋の表で山の高さ聞く
ペンキ屋の犬を騙すと山は雨
太陽が西から昇る仇討ちで

大阪市　大坂形水

モデルがモデルで省エネルック嫌われる
兎小屋とは日本をよく見てる
週休二日けしからんとこでアルバイト
騰ったら下らぬ土地が騰り出す。
銭単位の頃から掛けた満期額

大阪市　不二田一三夫

ぼくを生み父母は青春謳歌した
カウント9また立ち上がるわが暮らし
風船は虹まで行ける夢を持ち
両輪の箍がゆるんだまま　夫婦
　ルーツ・楠木河内守正成公
菊水の流れを汲んだ河内弁

大阪市　有信新之助

痴漢にも三分の理あり透ける服
わしの孫なら二つ三つはひっぱたく
気安さは石油が切れるまで保たず
はったりを利かすに肉が欲しい骨

堺市　高橋千万子

夫婦今日秘密で話す事が出来
脱サラの挨拶状にみる気迫
お徳用半分捨てたひとり言
ウソ一つ心に借りが出来たよう

大阪市　神谷凡九郎

馬鹿と云う言葉は自分用にしておこう
苦労などしらずに大きくなった罰だろう
経験と云う名で今日の私です
一昔十年といわれてた世もあった

東広島市　高橋鬼焼

目標を小さくつめてランドセル
フィルムの静かに廻る誕生日
こぼれ種明日へ燃えてみたくなる
油手に少年らしい夢をつめ

東大阪市　市場没食子

違和感で義歯をつつきに舌がゆく
お若い気ですがお歳の姿です
そそくさと出た旅今朝は帰るバス
紙網で掬ったのもいる金魚鉢

見も知らぬ人の情けをただ拝む　橿原市　岩井本蔭棒

破廉恥の記事よ妻も子もあろう
人妻の二字が不倫になっている
調理師というプライドが履く高歯　大田市　藤田軒太楼

なにくそと力んだあげくのひねり腰
残り火を掻きたて点火期を狙う
納棺へ亡母の手涙で組合せ
情実の行過ぎ変に勘繰られ　姫路市　大原葉香

太陽の雫が雲間からぽとり
霊魂不滅人間という仮住まい
忠勇の誉れは町に狭う住み
老の坂大事に行こう歩一歩　笠岡市　松本忠三

外面がいいと女房に批判され
平坦な道にも落し穴がある
人間を度外視してか医師のメス
脇道へ逸れればここも物凄い　鳥取県　清水一保

満ち足りた朝で秒針気にならず
愛だけが私の総べてと云うつばめ
目に青葉耳に生活の詩がさえ
つまずいた事も小石が罪を着る

写される花はポーズ等とらぬ　大阪市　欄蘭

人形にも薄着させたい夏が来る
冬に耐え春待つ花の身づくろい
倒産の記事へ心疼くものがある　松江市　恒松叮紅

夫婦して決め幸せの文字を書く
我流でも播けば自然の芽が生えて
無職でも今日はネクタイ締めて出る
美人だから小さな棘をのぞかせる　大阪市　山川阿茶

先生を目標に目標にとお世辞かな
傘寿といういとも重宝なかくし蓑
久しぶり転ばぬようにと云うて去に
おやすみと云うて死んだと亡母のこと　神戸市　仲どんたく

薄うなりましたなと十とせぶり
いかフライ義歯けなげにも挑戦す
牧童のように先生取りまとめ
片袖を濡らして銀座の菜種梅雨　大阪市　西森花村

養生法寿命は別と言いたそう
首吊りにエエなと思うぶらさがり器
使わずにおっても額広くなり
細胞の事など指圧師学を見せ

鉢二十並べて妻の小公園
後輩の歩巾大きく差をつける
神武帝に似たのが出前持って来る
みくじ引き　くじ買い夢の道続く

守口市　野呂右近

瞑想のまぶたに友の中の友
これからの期待へエンピツしのばせる
友達の一人としての胸を張り
ぬくもりよたしかに受話器の奥の声

岡山市　川端柳子

ハイヒールの歩幅が揃ってかっ歩する
答弁を考えタバコゆれている
病室のここにもボスがでんと居り
懐しい土蔵が車窓に故郷の空

柳井市　弘津柳慶

新刊書買うと歩巾が若返る
「闘魂」の額ある部屋に親しめず
風船よお前も世間を逃げたいか
島の墓地荒れて海鳴り過疎を哭く

倉敷市　稲田豊作

横糸に子がいて夫婦綾を織り
テトラポットの母いて父子和を保ち
子が病んでニュースも聞かぬ静かな夜
定年の近い机を拭き清め

呉市　槇田英詩

玄人の手ぎわにみとれている湯灌
仕手株のスリル血圧まで響き
貧者には意味が通じるプラカード
妻今日も重荷に耐える灸をすえ

米子市　小西雄々

汗かかぬ苦労は他人にわからない
風鈴が何もなかったように鳴り
白い花だから浮気は出来ません
しみじみと新茶の味へ老夫婦

松山市　谷真風

本当の味方思ったほどおらず
たかがゴキブリへ力が入り過ぎ
禿げるよりいいと白髪をなぐさめる
共白髪まではどうにか行けそうで

宇部市　平田実男

心ゆく今日の倖唄にそえ
宍道湖の夕ばえ画布を赤くそめ
一人くむ酒に故郷の唄がある
子の宝集めた貝の波の音

島根県　栂みどり

エプロンに豊かな愛の白さみる
紅灯のこぼれを稼ぐ一杯屋
母慕う施設の窓に星が降る
碧い海敗者の小うたとどかない

島根県　飯塚虎秋

東大阪市　斎藤　三十四

阿波生れ阿呆踊りをほめられる
花好きの人は善人の中に居る
お隣りのニンニク料理鼻へ来る
塾通いの点取虫を笑えない

大阪市　北　勝美

あきらめを悟りに替えている余白
猥談へ笑う心はまだ残り
おかげ様その一言に生かされる
ループタイ柳人タイプと云う姿

和歌山市　内芝　としよ

新婚は一味足らぬも褒めて食べ
寄り添って小さな野菊は群で咲く
底辺を生きる夫婦に嘘がない
明日へ向く足は逆境うけて立つ

大阪市　室谷　徹舟

たんぽぽが子孫を増やす風の旅
一人泣き子供の遊び幕となる
きりないと悟っていても上を見る
欲望と云う人生に自灯明

倉敷市　小幡　里風

身の軽さ見せて盗人猫逃げる
二の足を踏む裏門が開いている
静寂が毒にもなったノイローゼ
倖になる無駄足ならば踏む

島根県　大森　孝華

老境の歩巾へ合わす色を選り
素顔など見せぬ意地あり薄化粧
滝壺の飛沫　煩悩あざ笑い
善人になって故郷の春を吸い

寝屋川市　江口　度

赤旗を常識程度に振っておく
二枚目の舌は鳥居に置き忘れ
発車ベルホームの軒の眠り鳩
長髪の子供育てた懺悔録

鳥取市　岸本　無人

雑草の芽だとは知らず水をやり
世渡りを知らぬ香車の一本気
白書とは遠い生活に居る庶民
ガラ空きの特急待ってる通勤車

大阪市　江城　修史

西いわを氏逝く

人間味いましみじみと在りし日を
明日を組む夫婦に稼ぐ詩があり
老らしく素直になれぬ日が憎い
記憶とは哀し脳裡をよぎる影

和泉市　西岡　洛酔

喜びも悲しみも越え米を研ぐ
文机に向う余生を温める
残り火の女に揺れるイヤリング

同じ血の脈打つ孫の愛おしく　松江市　梅本登美也

堕ちてゆく女言葉を飾らない
山つつじ誰に気兼ねもせずに咲く
妻ちゃんととじてる給料明細書
無医村へ女医が天使のようにくる　今治市　長野文庫

こしらえた鼻らし何だか冷めたそう
途中下車みたい風邪引き三四日
正論も貧しさゆえに見くびられ
投書欄どちらの説もごもっとも　鳥取市　有田とし江

やわらかな料理で祭りの老母を待つ
寝つかれず遺影の夫と対話する
訳もなく泣ける枕を裏返えす
追伸の老母の一行ありがたし　神戸市　中村ゆきを

迷い出てひとり問うてるコップ酒
したたかな賢女だったと母思う
食って皆薬出してるクラス会
どろんこのはだしが笑う知恵おくれ　平田市　久家代仕男

お叱りを頂きにゆく髯を剃る
怒らない父に叱られ泣き止まず
無駄足を踏む楽しさもある出逢い

独り酒妻の遠出に憮然たり　寝屋川市　柴田英壬子（恵美子改め）

一年を恨まずくちなし匂い初め
御堂筋萌えるいちょうへ吐き出され
シンプルに生きてまわりと和の鎖
ひなびたる宇治の鵜飼いにこころ満つ　兵庫県　大江秋月

顔中を口にした程孫笑い
夕立へまばたきもせず石地蔵
ママさんの乳房も揺れるランニング
転勤へ植木も一緒に従いて行く　京都市　松川杜的

春宵一刻さつきの鉢を置き変える
常連になって茶房に俺の席
デジタルの功罪時計読めぬ子が
ついてる日信号までが青・青・青　大和郡山市　森田カズエ

搾ってもでない脳みそ子にゆずり
嬉しい日吹く口笛はうますぎる
年金へ老後の夢がしぼみかけ
灰皿もじっと我慢の無駄話　貝塚市　行天千代

背かれて女は強く生きつづけ
おぼろ夜をそぞろ歩いた亡夫を恋う
挿木したつつじ絞りの花咲かせ

無駄に生きて此の世に残す何もない　竹原市　鈴木かつ子

落日へ思い出だけが過ぎてゆき
道草でなかった過去のまわり道
妻に背を押されて登る夫婦坂
苦労した汗にこたえる子の門出　三重県　坪田冬花

恩師の瞳涙一筋見つけたり
カラオケによもやと思う顔が出る
煩悩の火が消えました子の病い
遺言状見て天国の父に詫び　出雲市　高橋可保留

雑草が先ず芽を吹いた花畑
通勤の途上で拾ったエピソード
白髪になってて教え子戸惑わせ
教え子が譲って呉れた自由席　岸和田市　清野こう

長弓寺　矢田寺見学（二句）
ぬかずけば慈悲たれ給う観世音
五月雨に煙る大和路塔沈む
丸うなる背を心して胸を張り
長風呂の夫に不安のノックする　大阪市　津守柳伸

幸福さん集う旅路に趣味競う
生計の垢まで癒やす道後の湯

前向きに生きねばならぬ世間の眼
止り木の隅は私の指定席　橋本市　森脇善太

身近に花置いていた日のゆとり
宿命の言葉に貼った禁ラベル
引潮の砂に自責を繰り返し
倖せを他人ばかりに見つけ出し　兵庫県　辻文平

針千本娘の為に飲むとする
古里の風が仮面を逆撫でる
ほおずきを鳴らして母も若くなる
ママ泣かせ坊やは大器かも知れぬ　鳥取市　大塚豊生

絶壁を切り裂く滝の打つ祈り
村ひとつダムに沈める起工式
メルヘンの国へ子の無い夫婦づれ
俗名をとどめて父の名札まだ　岡山市　時末一灯

法治国節税という蛇の道
躓いた男へ雨の横殴り
今日生きた証し夕焼雲燃える
新緑に染まる俎句きざむ　島根県　堀江芳子

花道を思うまま行け子よ翔べよ
平凡を幸だと思う夫婦箸

いいことで出てゆく札の厚みかな
励ましも傷つけられるのも言葉

寝屋川市　宮尾　あいき

瀬戸の島絵になる船の硝子窓
樹齢千年の松と大師の石手寺
屋島霊場遍路の鈴もさわやかに
老の意地松山城の天守閣

兵庫県　河原　みのる

満目稲田みんな電気の要った水
カン、ランのセックス派手なはでなこと
青刈りの田土のなげきが聞こえそう
ホトトギスの声はいつから聞かぬやら

和歌山市　福本　英子

遠い子を待つまい愚痴になる田植
自惚れが消えると女死んでいる
五月闇不気味が迫る救急車
中流が鼻もちならぬクラス会

京都市　山本　規不風

悪口も薬と明るい嫁でいる
一周忌済まぬに縁談次ぎ次ぎと
善人に還れば占い吉と出る
悪心へ痛打一発夢の父

大阪市　天正　千梢

べにが濃すぎるにせものかも知れん
足腰の痛み峠かも知れず

甘い点つけて衿を正している
乗り切る二人翼なめあって

鳥取市　両川　洋々

神様は大らかA級まで英霊
共鳴の政治に遠く居る日銭
前例と慣例弱者にのしかかり
柏手はA級戦犯へは打たず

鳥取市　小林　由多香

罠かける秘密は心の底に置き
土くれをほぐして春に触れてみる
値切られた分だけ手抜きして渡し
母さんの出っ歯茶の間に笑い添え

今治市　月原　宵明

七十の歯が音たてる岩おこし
銃口をこちらに向けた猜疑心
溺愛の死角の中のインベーダー
恍惚の国へ頬杖連れてゆく

竹原市　三宅　不朽

父と子の拳が開く海の詩
人の訃や夕日と重なる故郷の母
夕映えのほのぼの夫婦という背よ
慈顔なお　野仏あふれしむ梵鐘

大阪市　河野　君子

梅漬けて緊張感の二三日
はしゃいで後ろの影にある憂い

再会へ日傘の中のふたごころ
埋れ火の風に逢わねば炎え立たぬ　下関市　国弘半休門

人の道車の道に巾取られ
七十歳ようやく自給自足する
お守りを首にランドセルが鳴る
古くとも五右衛門風呂で労を慰す　大阪市　小出智子

人恋うる日の玄関に花を活け
大阪弁どうやら儲けているらしい
友達の冗談だから笑えない
同性にしても眩しき水着かな　松江市　柳楽鶴丸

魔よけの柱をゆっくりなでまわし
久し振り亡き戦友と対話する
楠公の銅像をマンションにする雀
議事堂や日本の歯車のきしむ音　姫路市　梅谿庵不酔

又出るの片眼達磨が泣いている
胴上げで公約スッカリ忘れたり
再婚へ伝馬二叟も曳航する　唐津市　新岡回天子

アユタヤの仏像みんなヘソがなし（東南アジア（三））
シンガポール日本軍の功もきき
陸あり海あり夜景成る程世界一　枚方市　宮川珠笑

求人の学歴不問欄探す
定年へ資格取得のスケジュール
激論の父子に競馬の予想表　香川県　岡田拳法

金　金　金　汚職亡びる世ではない
成果挙げマグレマグレと胸を張り
釈迦の掌の中の悟空は俺だった　大阪市　河井庸佑

成長と共に苦労の種変わる
同じ子でこうも違って来た思想
夢のある顔並んでる新入社　仙台市　川村映輝

夢はもう子から孫へ移ってる
朝窓を明ければ雀がむれてくる
忘れてた唄が出るほど上機嫌　大阪市　柳原静香

散ってなお想いを残すバラの芯
気苦労は知らず痩せたのを喜こばれ
年金の夢より小さなものはなし　松原市　北野久子

励ましてくれる夫の肩も落ち
耐えられぬ不安へ孫のあどけなし
物差しでとても計れぬ夫婦愛　大阪市　西川誓二

森と小鳥ああ環境蘇る
甲斐性のない故郷の親をまた騙す
手形落として当分息が継げ

島根県　榊原秀子

花嫁へ父の涙はみせまいぞ
可憐さがいとし都忘れの花が好き
心臓が止まる想いの訃報きく（弟の死）

鳥取県　金川満春

憤懣をおさえ笑顔で聴いてやる
末の子も重荷おろしたゴールイン
春風駘蕩勿体無いと思う日も

熊野市　西久保苔石

茶を揉んで五月の香り手に拡げ
茶も摘めば明日は泥田が足を待ち
酒にしたい巷の風に身がまどい

鳥取県　川崎秋女

嗤われる覚悟ちいさな我を通す
嘲笑を背に七十五日の今日終る
五億云々　テレビがしゃべる手内職

鳥取市　佐々木静泉

妥協するための逆らいだってある
黙秘権ああ妻の眼がつきささる
流し雛にがい想いものせてくれ

鳥取県　福田保子

歯に衣着せぬ苦言を吐く別れ
悪を斬る新聞記者のペンとがり
被害者の母です罪をにくむだけ

寝屋川市　高田博泉

机だけ意気込んで待つ月曜日
阪神が勝つと父の口軽い
まっすぐな道をさけたい日の迷い

和歌山市　吉野富子

アップダウンクイズに似てる我が人生
一匹の蟻が走っているオルグ
消極的燃える火種へ寡婦の性

和歌山市　坂口公子

新人の顔で雑草そっと咲く
単細胞になり切る事のむつかしさ
水蓮の花へ焦心置いてみる

大阪市　黒田真砂

雨だれに耳かたむける孤独の日
先んじた一歩へ強い風あたり
合鍵で貴男の心探り度い

大阪市　神田秀峰

日本に一人しかない名付親
適当に降ればこんなに喜ばれ
婚礼の派手なお方が離婚する

岸和田市　島崎冨志子

没の句に未練がましく化粧さす
さりげない言葉やんわり胸を突く

喜寿祝う母指折って何数う
海南市　牛尾緑楼

タイマーが飯を炊いてる共稼ぎ
紫陽花も女心を計りかね
分譲地妻と通った会社趾
八尾市　納糸葉

振り返る一とこ炎える女坂
見送って二十四時の重さかな
人の世の訣れの涙くり返し
東大阪市　萩尾真佐志

酔っていたからと男軽く逃げ
正論と信じて娘負けていず
露出度と水銀柱の正比例
岸和田市　狭間希久志

宮仕え代役ほしい二日酔
梯子酒足が教える次の店
冷えびえと母なきあとの里の庭
大東市　土岐トク子

追憶の涙よ藤色の吸取紙
あじさいの濡れて亡夫の挿木かな
夢で見た亡夫は両手を差しのべる
大阪市　藤田頂留子

相性が悪いと没句なぐさめる
真言に今宵大師の笑み拝す
紙くずに当り散らして探すメモ
東大阪市　崎山美子

貧乏な生活にほしい句読点
いつまでも心に子供持ちつづけ
世渡りが上手い男の二枚舌
兵庫県　藤後実男

試す気が本当になった日の誤算
夢抱いて女喫茶でまつ時間
腹割って話す相手ある小雨
藤井寺市　中原比呂志

人の描く地図にわが色塗ってみる
正直に言うからまともに跳ね返り
合掌の指から故人がよみがえり
岡山県　直原七面山

罪発く刑事の目
ボスらしく策に長け
伊藤茶仏

蹲いに寛の音がするゆとり
道一つ隔てて意見噛み合わず
親と子に対話が弾む花菖蒲
つまずいたとこで一服するゆとり
ポケットの数珠をまさぐるお人好し
正本水客

吉備路

さみどりの蘭草は初夏をひそませる
蟻がもう出て来て土も夏の息

水蓮のひとかたまりに陽をよける
回廊は緑りの風が従いてくる
国分尼寺わがもの顔に礎石ある

西尾　栞

短冊にのる字で伝言板を書き
職安の椅子で読んでる将棋欄
姓名判断でつけたらしい内祝
この頃の古稀の達者を蔭できく
立読みの背中へ春の陽がこぼれ

浜田　久米雄

功無きを恥じて晩酌だけは飲み
片仮名が増えて年寄りには困り
友達に電話をかける種が出来
言うだけを言うて嫌われ者になり
飲まず食わずで出かける検査暇が要り

本田　恵二朗

内弁慶のうぬぼれ老妻聞き飽きる
水平線で嬉しい今日がもえつきる
読経する心へ亡母が笑みかける
選び抜き選ばれ抜けて結ばれる
極く普通の父であるから父が好き

尼　緑之助

草萌えて子等遊ばない川となり
どの駅もさつき山陰線鈍行
杉木立すくすく子の夢父の夢

さて寝酒俺の酒だがぬすと酒
夏の腕からも女は話し出す

菊沢　小松園

父の日を父は決して口にせず
なるほどと思う処に富士聳え
神様の都合で御利益あったり無かったり
真すぐに桂馬跳びたい日もあろう
面白いほど金の出てゆく月になり

川村　好郎

あとさきに歩きつづけて夫婦なり
雨つづきいわをさんももう居ない
前向きに歩けと影が離れない
天あり地あり明日を疑わず
あの頃に戻れば云い分ない女

若本　多久志

孫　三　句

強情は隔世遺伝か孫の顔
出来る子と出来ぬ児　俺の血はどちら
牛乳で育ったせいか牛が好き
うす味に心遣いの嫁の膳
文具屋でこより売ってる世を嘆く

川柳太平記(15)

五色墨の出現と江戸座

東野大八

慶紀逸と柄井川柳の処生上の符合した点については前述したが、この両者の相違点は、紀逸が江戸座点者としてその生涯を終ったのに対し、柄井川柳はいち早く江戸座を脱したことと、紀逸は「武玉川」発刊には撰者と編者を兼ねていたのに対し、柄井川柳の、「柳樽」は撰者と編者が全く別人であったことだ。

ここで当然、一体江戸座とは何か、ということになるが、要約すると以下の様になる。

「貞門俳諧が俳言を基準とする形式主義によって単調となり、加えて思い上った式目の厳粛さを振り回した反動として談林を呼んだ。この談林俳諧を遡れば宗鑑・守武流の精神に及ぶわけだが、支考の仮名詩を加味して、式目無視、用語の自在性の見立て、取り成しは宗教的中世の権威や階級性に反発し、謡曲や狂言の古典的な発想や詞言をもとり入れた戯言的表現に陥った。

このことは時代の推移と文芸復興的な人間の回復、解放性が近世町人意識の昂揚を裏づけもじり、軽口道化の悪洒落に景物とりの射倖心が拍車をかけ、談林はついに蕉風の俗化堕落を招き、その正風俳諧のこころを消滅するに至った。その俗化した談林の痕跡を敢えて求めるならば、それは江戸座の中にある。

「談林より次第に俳諧上手に成、手を尽し作をつくしたり。されば長点の句は京も江戸も符節を合わせたるが如く極る。是より俳風乱れそめて（中略）京江戸田舎ともみだれ立て、此時談林俳諧滅亡のしるしなり」（森川許六「歴代滑稽伝」）

江戸座の開祖は宝井其角（慶安三年一六五〇～一七〇七）であるが、彼は嵐雪とともに蕉門の挑桜と称せられ、江戸座洒落風の祖と俳史にある。しかし、どの俳史をとっても彼の評判は至って香しくない。その例を蕉風的見地からの批判によると、彼は伊達を好み、作為的な点で定家卿になぞらえるとする芭蕉評（花実集）佳句はすぐれているけれど、悪句もおびただしく（答許子問難弁）不快なる変風（去来の其角書）器はよいが良き指導者に非ず（許六の青根ヶ峰）酒肉を好み花街に出入りし、しかも先師の心を踏まぬ非凡の者（三上吟）など、虚名ばかりの俳人説が多い。

彼についてさまざまの俳論批判も多いが、要は彼自身の性格に由来するというのが結論である。元来、彼は師の芭蕉を煙たがり、閑寂幽玄にして細みを愛する芭蕉とは逆に、妖艶華美を愛した。このため師の亡きあとは、虚栗調もきわまり、同様の性格と俳調をもつ沾徳沾州一派との合流は、前句付界を結局、側面から興隆させる因をつくった。彼と並んで初期江戸蕉門の双璧とまで称せられた嵐雪こそいい面の皮であった。嵐雪は正風蕉門に徹し、晩年は江戸の俗風にそむいて禅門に入り俳諧の堕落を他に死んだ。彼は其角より七歳

の年下で宝永四年、芭蕉没後十三年目にして其角とともに没した。其角四十七歳、嵐雪五十四歳。

—我もらじ新酒は人のさめやすき　嵐雪
—梅一輪一輪づつの暖かさ　〃
—甘酒に桃裏の詩人髭白し　其角
—蚊をやくや褒似が閨の私語　〃

二人の作品比較例は右の通りだが、其角の洒落風は、芭蕉の死とほとんど同時に表面化し、往時の業俳者が、世人の興趣の赴くままに付句体の洒落風に染み、其角は本来の性格もあり、晩年は低俗な前句調に堕ちていく。

江戸座は其角のこうした洒落風に加え、各務支考の仮名詩の気運が充満していた。座中の皐月平砂（天明三年七十六歳没）は、支考に傾倒し、その「国語の詩」で支考の功を讃え「此詩や享保・元文の間、東都の詞人群をなして学び伝えんものをと、さかりに坑しことあり」とある。紀逸や谷川楼川は、この仮名詩に、形式的押韻をふまない自由仮名詩を付句体に積極的に用いた。帰するところ「武玉川」はその産物であるとみてよさそうだ。彼の武玉川調のアイデアはすでに述べたが、それは若年の頃の紀逸が、祇空に俳諧の真を見出した頃とは大いに俳道の真を異にする。このことは支考にしても、其角にしても、その晩年の低俗への傾斜が急であった点と軌を同じくしている。時の移り変りと世人の迎合に応じる業俳者のたどる道であるともいえる。

このような江戸の江戸座の一大勢力の前に登場した「五色墨」は、甚だ微力ではあったが、芭蕉の人格と作風への敬慕をうたった祇空の正道への反省と志向への指導力は、やがて俳諧中興の祖、蕪村を掘り起すのである。

祇空の提唱によって、名もなき五俳人の手で世に出た「五色墨」は、作品より蕉風回帰のスローガンが一しおの意義をもった形で、この系列を承けて「続五色墨」（宝歴元年刊）を出し、江戸俳諧の世界に台頭したのが大島蓼太（享保二年一六一七～一六八七）である。この蓼太こそ、のちの柄井川柳の師であり、川柳が所属した一門の総帥となる人物である。

さて話を慶紀逸の頃に還そう。この紀逸門から図らずも一異材が出た。炭太祇である。

俳諧の暗黒時代といわれた享保の俳諧に、その点取俳諧の業俳点者の横行と、世人の堕落俳諧を嘆いて「蕉風に正せ」「芭蕉に還れ」のモットーを高く掲げて、天明中興俳諧の世を築いた人々。それは京の蕪村、太祇、江戸の蓼太、白雄、尾張の暁台、伊勢の樗良、播磨の青蘿、加賀の麦水、闌更らで、彼等の活躍は多少の年代のずれこそあれ、この俳人群が最も活気横溢した時期は、明和・安永期の十三年あまりの間であった。

これらの人々は、その青壮年期にあっては芭蕉の俳諧を祖神とするほどの意気と闘志と行動力を示したが、いずれもその晩年は、世相に応じ千差万別のわが道を行く業俳点者に堕ちていく運命を担っていた。しかし、最も清廉に所信を奉じて、俳道の真に生きた唯一の人物は蕪村と太祇に帰するようだ。

炭太祇（宝永五年一七〇八～一七七一）は四十歳まで江戸の江戸座に所属し、慶紀逸門に加り、俳諧の道に生きていたが、四十の声をきくと繊然として悟るところがあり、法体となって奥州から九州にかけ大旅行を試みた挙句京に落ちついた。師の紀逸から祇空の人となりを知り、その師の衣鉢に生きるはずの人が浅薄な仮名詞流に業俳の渡世にあって活淡たる師紀逸に反発、出門の旅に出たという形の太祇だが、彼はその出生の因縁（詳細不明）と、そこからくる諦観無欲の性格は、蕉風こそわが生涯の禅風とみた節がある。漂泊の旅への誘いは、俳壇の名利獲得と地盤拡大に正体もなき俳壇諸家への批判もまた内在していたことは否めない。

西原　亮

誹風柳多留廿五篇研究

—（二五丁）—

清　博美・八木　敬一・紀内　恒久
青木迷朗・西原　亮・鈴木　黄
室山三柳・入江　勇・岡田　甫

450 **音のした池へ翁のかげうつり**

清—「古池やかわず飛び込む水の音」。翁は芭蕉。

青木—賛。

芭蕉翁ぼちゃんといふと立留り　一七・34

古池のそばで芭蕉はびくりする　二二・26

古池がぽちゃんと云ふと矢立出し　天五・宝2

室山—同。池のそばへ寄ったのであろう。

岡田—同。但しつまらぬ句だ。

451 **折鶴にばかり息の音嫁ハ出し**

清—日頃から、ひかえめに暮らしている嫁。折紙細工の鶴を折ってフット息を吹き込む。その時ばかりは、ちょっとばかり力む風情が見られる。

折鶴にふいとふくれる嫁の顔　二五・4

は既出の句。

折鶴の開眼口でひとつ吹き　四一・36

岡田—賛。

452 **ひいやりと子の筆をもぐ金屏風**

清—金屏風の前で墨のたっぷりついた筆を振り廻わされては…。それこそ、きもをひやす思いで筆をとりあげる。

青木—賛。金屏風は借り物だから、肝も氷る思いをする。

西原—賛。内心肝も氷る思いであろうが、外見も落付いて静かに筆を取りあげる。どなったはずみに、どうなるかわからないから。

室山—同。やはり借屏風ではなかろうか。自分の家のものでも一向にさしつかえないが……。

岡田—同。

453 **爪の長いハ琴よりも三味せん**

清—奥様と妾。実際は琴に爪があって、三味線はばちだが、妾の立ち振舞いは奥様を圧倒する。それを琴爪に表現した句。

鈴木—賛。「爪が長い」とは、欲が深い事である。『源氏大草紙』に「お気の短いその代り、お爪の長いで算用つくつく」とある。また、『神霊矢口渡』には「爪の長さが三十三間三尺三寸三分三厘三毛三払」とあり、句意は奥様は無欲だが、妾は欲が深いという事であろう。

室山—鈴木説おもしろし。賛。むろん裏に奥様の琴爪をきかせていること、礎稿の通り。

岡田—ほんとうは、爪の長いのは琴を弾く奥

様の方だが、じつは……の意。

454 **先箱て出る助六ハわり下水**

清―「先箱」とは、大名行列の先登に担わせる挟箱で、中に正服を入れて置いたもの。家格に依り、金で定紋を現していたので、俗に金紋先箱ともいわれた。「割下水」は本所の一地名。北割下水と南割下水とあり、南割下水を単に割下水という。この割下水には、津軽家の江戸屋敷があった。津軽家の家紋は、杏葉牡丹で、これは助六の家紋と同じ。

そこで、家紋が助六と同じである所から、金紋先箱に杏葉牡丹のついた行列は、割下水の津軽家であるとしゃれたもの。

入江―賛。津軽侯の上屋敷、詳しくは本所南割下水に沿う緑町三丁目にあった。

岡田―同。

455 **思わずしらず貞室ハ一句出来**

清―「これはこれはとばかり花の吉野山」という貞室の句は有名である。この句の「これはこれはとばかり」を「思わずしらず」として詠んだのが主題句。

吉野山お久振りのようにほめ　五二・18

八木―賛。

まっすぐに言ッて貞室落をとり　竜三・27

よしの山しばらく過ぎてものを言イ　竜三・7

岡田―同。

456 **誉られる度持直す日傘**

清―これだけの句か。手に持っている日傘をほめられて、得意気に持ち直して、これみよがしにする。

八木―賛。それだけであろう。

青木―同。日傘を持直すのは娘。持直すのは恥しがってではなかろうか。

室山―人間の気持を詠んだだけの句。われわれでも経験することである。誉られるとそのままじっとして居られぬもの。

岡田―「日傘」は「日唐傘」と読む……という付記が必要。

457 **式日の手紙日付ケの下へ賀し**

清―式日は婚礼の日でも言っているのであろうか。その招待の手紙を受けとって、式の日のこよみの所へつけて、お祝を待つ。

八木―そのようなことと思うが、よく分らない。

青木―同じくはっきりしない。式日は婚礼と限らなくてもよいのではなかろうか。

岡田―ハッキリしない句。日付の下の余白に祝い心の句や詩歌を貰った人が書き込む……とでもいうのか。

458 **桜からさくらへこける面白さ**

清―上野・日暮里・御殿山あたりの、花見から、二次会の花見は仲の町の花見へ流れて行く。紅葉狩から吉原同様、花見もまた吉原行の絶好のチャンスとなる。

ばかりではいやだと桜連レがなし　二三・1

そもそもどらの濫觴ハ花見せ　一〇・19

高声で花見〳〵とさそうなり　安元・松4

室山―賛。不語の「花」から有語の「花」へ――。夜桜。

入江―同。室山氏の言われる「夜桜」へ。

岡田―上野・向島の花見から吉原仲の町の花見へ。御殿山から品川へ……で、吉原へは遠すぎます。

459 **お妾は柳左久良をこきつかひ**

清―「見渡せば柳桜をこきまぜて、都ぞ春の錦なりけり」素性法師の歌を、文句取りにして、お妾の下女乱用を詠んだ句。柳・左久良は下女の名前として利用。

青木―賛。

御局は柳桜をこき遣ひ

部や方は柳さくらをこき遣ひ　宝一三・礼4　拾四・15

室山―同。「お妾」であるから、「下女」でなく、侍女・腰元の類であろう。成り上り者のお妾だからである。

岡田―同。

終戦記念日に想う

島居百酒

昭和十六年十二月十日、われわれ先鋒隊はフィリピン北部地方のビガンに敵前上陸した。つづいて同月二十四日、主力の本間兵団がリンガエンに上陸し、勢に乗じて敵の米、比軍を、バターン半島の山岳へ封じこめ、苛烈な激戦が展開されていた。

要衝ナチブ山を陥し、マリベレス山に退却した敵を猛攻中で、その戦闘指揮所を建設の命令が、わが野戦建築小隊に下ったのである。われわれがトラックに分乗して、マリベレス近くの山麓に進出したとき、敵の猛砲撃をうけて前進を阻まれた。

小隊長は、少しでも被害を避けるため、その地点から山中の森林を潜っての前進が可能か、どうかの地形偵察を、補充兵役で応召の二等兵である私を長とした新兵ばかり七名に命令した。

われわれは、地図で示された方向に向って小山の段々畑を一段一段と頂上を目指して攀登り、先頭の私が、頂上近い畑の石垣を攀上って腰を伸ばそうとしたときである。足許の直ぐ近くに、死体が転がっているのを見て、一瞬ギョッとして立ち竦んだ。

なにしろ名だたる激戦地の跡なのである。気を鎮めて見回わすと、畑一面に無数の戦死体が乱雑に転がっていた。そしてその間に点々と掘られたタコ壺の囲わりには、敵の機関銃の薬莢が山盛りに連らなっていた。

死体の殆どは比軍兵だ。そうした中に、膝から下の片足だけを出して土で覆われた戦死体が点在しているのが見られた。近寄って確めると、巻脚絆と軍靴からそれが日本兵であることが判った。

思うに、激戦に続く猛追撃で、遺体を処理する余裕がなく、とりあえずの葬いと、後日収容の目印に、こうした措置がとられたものと察しられた。

腹には千人針や、武運長久を祈る寄せ書きの日の丸を巻き締めていることであろう。欲呼に送られて晴々しく出征したのであるが、肉親や家族達の知らぬ間に、こうして祖国を遠く南溟の戦野に屍を晒しているのである。

下から攻め登った日本軍の苦闘と勇猛に痛く感動し、遺体に心から感謝と哀悼の敬礼を捧げた。そして、どうかこれ以上犠牲をださないで、このマリベレスの闘いを最後に戦争が終結するよう天に祈るのであった。

不思議と異臭は感じられない。だが、相変らず、砲声が砲声以外のあらゆる音を消し、前りつけるような大地には戦ぐ風もない。灼熱の太陽は怒ったように目をむいで、強烈な光を放ってこの凄惨な戦跡を睨みつけていた。

歳月を重ねるにしたがって、緒戦の戦果も敢無く、勝利の甘い夢は次第に苦悩のうめきに変っていった。物資は年毎に窮迫し、敵の空襲はいよいよ激烈となってきた。戦局は一転し、切迫したものが感じられだした。その頃、ミンダナオ島に駐留していたわが隊に、昭和二十年四月、中部山岳地帯に転進し複郭

陣地を構築せよ、と命令が下ったのである。

食糧も欠乏したまま人跡未踏のジャングルから深山へと、苦難な行軍がはじまった。すでに、日頃からの栄養失調やマラリヤの再発などで斃れる者が続出し、悲惨な様相は日増しに濃くなっていくのである。この遺体を、ジャングルの腐土に埋めてやるのが精一杯の葬いなのであった。

衣類は汚れ破れ、履物はもう用に立たなくなり、全員が跣足の行軍である。でも最後の勝利を信じ、何かの食料を探し求めながら飢餓に耐え、病魔と闘い、言語に絶する苦難にうち克って生き抜こうとする、幾月かが経った。そこへ、思いもよらぬ敗戦の悲報がもたらされたのである。

集結地が指示され、速やかに下山して米軍の指揮下に入れ、と云う軍の命令である。食料を探しつつ彷徨して五ヵ月もかかった現在地から指定された地点へ着くまでに必要な食料を調達の手はずは何もない。敗戦という気落ちが体力にまで影響し、飢餓と疲労に衰弱は一層増して、下山のジャングルで、あるいは漸く川辺に辿りついて筏を利用した者は筏の事故で、案じていた通り大勢の者が悲痛な死をとげたのであった。

後日、収容所で聞いた話である。

下山の途中のジャングルで、力なく足を投出し樹に凭れて、片手に細長い小枝を構えて喘いでいる兵がいた。訊けば、空腹と衰弱のためもう歩行の体力も尽き、小蜥蜴が近寄るのを待って、その枝で叩き捕えて食っているのだと云う。一日に四、五匹捕れることもあるが、一匹も捕れない日もあると云う。哀れであったが、どうしてやることもできない。多分あのまま彼処で死んでしまっていることであろう、ということであった。

また、入隊以来私と同班で、予ねてから栄養失調で衰弱していた同年兵が、筏が壊れて河原に打上げられ、気息奄奄としているのへ、同様に筏事故で川辺伝いに歩行していた戦友が出会い、声をかけたが、彼は虚な目で、自分が排泄した液状の下痢便に孵化した蛆を摘んでは食っていたという。

彼の消息はそれが最後で、勿論、復員はしていない。

出征して戦争の悲惨さを体験してから、平和の有難さと尊さを、真に肝に銘じたのである。人間同士が尊い命を奪い合う愚行は、最大の悲劇であり、罪悪である。それなのに、何故いまだに戦備に熱中しなければならないのであろうか。

軍備を背景に覇権を握ろうとする国が、この地球上にあるとすれば、それは人類の敵であり、悲しむべきことである。

（本社常任理事・島居百酒著「**比島戦線従軍回顧録「白い歯」**」は目下好評発売中。定価千五百円―発行所・東京都世田谷区三軒茶屋二―十九・構造社出版株式会社）

一分間の柳論

林　葵丘

今日、新聞の柳壇、地方句会の入選句集等に、戦友を「とも」旧友も「とも」はなはだしいのは「入学れた」と書いて「はいれた」等、わざわざ仮名を振って読ませている句に出会うことがあります。私はこのような句はすべて没にすべきだと考えております。

文字を自分勝手な読み方をし、それをすべての人に強要していると考えるからです。

戦友と書いてどうして「とも」と読めるのか不思議なのです。また一方から見れば十七字という川柳の制度へのごまかしであると共に、文字に対する冒とく以外の何ものでもないと考えるのです。何故戦友と読んで句になるよう推こうしないのか残念でなりません

文字によって句作し発表している私達川柳人は、書いた文字を見なければ句意がとれないでなく、耳から入るだけで十分句意の汲み取れる川柳を作って行くことこそ、最も大切な心の持ち方だと思い実行しております。

五煙抄

川村好郎選

誰も来ぬ個展へ煙草ばかり吸う
四季の歌うたう孤児等の瞳が渇き
惜しい人なくしましたと空涙
ゴージャスな家具へ空虚な音を聞き
いい女だから波紋がからみ合う

熊本市　有働芳仙

女今小さな火薬抱いている
きのう今日あしたも変らぬ夢を抱く
足ぶみで待ってくれてる人がいる
手を合わすそれしかできぬ淋しさよ
姑という理解者がいる幸せよ

竹原市　古田寛子

一行の詩をポケットに旅終る
薄埃縫うて物憂き鯉の群れ
野あざみの刺に手折れぬ日の疲れ
飾り窓向うの傘に雨が降る

八尾市　高杉千歩

駅からは足に任かせて私の時間
父ちゃんは嘘がうまいとほめられる
振り切ってみたが歩巾の乱れがち
負いきれぬ苦労はないと信じ耐え
さばさばとし過ぎて頼りなくみられ
ことごとに振り向いている気の弱さ

大和高田市　岸本豊平次

タイマーへ夕餉あずけて共稼ぎ
孫の歯をのぞく茶の間の笑い声
ご利益の石段老いにけわしすぎ
人生の坂登りつめ抱く不安

米子市　野口美世

真ごころは涙の海の真珠かも
精一ぱい天を仰いでいちりん草
疾風にも心の旗は倒せまい
子を乗せる小舟に打算などはない

福山市　桑田静子

慇懃な相手で話はかどらず
セールスマン吊革で今日の秘策練る
足向けて寝られぬとこが多すぎる
年金を杖に人生旅の果て

大阪市　白石　潔

山開き彩とりどりの花歩く
秒変の山の姿を持ち帰える
束の間の朝焼け抱きに山男
草わけはつねに拳をにぎりしめ

島根県　谷岡　芳枝

重い靴花の香りに甘えたく
ボケ一輪季節はずれて慰さめる
紺碧の海で過去など語らない
ロマン生む海よ魔性を秘めており

広島市　光井　みほ

お互いに呆けたと喧嘩にもならず
削られた山の端にも月が出る
水槽の片隅み金魚の私語がある
服も靴もとっくに定年過ぎている

名古屋市　越村　枯梢

美しい瞳サングラスで隠し
窓際の堅い机の先きがみえ
母の日に母のない子と箸をとり
塾通いさせ中程という期待

高槻市　大垣　たもつ

針箱の艶に亡母の影をみる
国なまり出し合い団地の広くなる
針含む言葉がささる腹の底
手作りのアヤメで亡夫を慰める

岡山市　砂田　静佳

入院

執刀医夜叉に見えてて拝んでる
手術すみナース女の顔に見え
退院を庭のみどりが萌えて待ち
老病みて絆の深さ妻に知り

兵庫県　野々口　ゆう也

長男誕生

息子には息子の山や河がある
長男の勲章もろて荷が重い
男前や言うても生後十日なり
長男が生まれて少しケチになり

川西市　氏林　洋敏

たかぶりへ小さい私をふと気付き
鎖だけの自由に耐えている首輪
言い勝った悔が私を攻めて来る

岡山県　池田　半仙

風鈴の音色が替る郷里の風
腕を組むポーズ父権を失わず
寝相だけ写してならぬコンパクト

富田林市　中村　優

母のない身に所在ない母の日よ　豊中市　満仲　きく子
嫁じゃない娘と思うている平和
とある日婦唱夫随の新茶汲む　高知県　山下　登
気兼ねなく脱いで白帆の見える部屋
喜々として目高追う子に水温む
塗り机軒端の若葉うつし居り　高槻市　竹内　花代子
竹垣で春の誇りをもつ牡丹
鶯の声を真似てる峠道
ベランダで野草の鉢も花をつけ　寝屋川市　福富　隆子
とまどいは自分の体がままならず
あこがれがそのまましぼんだまま老いる
ぽっくり寺お参りするのもおっくうな　大阪市　堀口　欣一
鈍行でゆく楽しさの湖西線
新緑の中にむかしの小浜城
鶴見緑地わが家のように飛ぶつばめ　八尾市　田中　紀美代
ゆびきりがくちづけとなる傘の中
おぼろ月こころ決まらぬままに逢い
別々の想いを抱いている波紋　島根県　角　耕草

ちらほらと男が戻り村の春
百姓はせぬ約束の嫁も植え
水口に待つ子の方へ鮒を追い　西宮市　山田　喜代子
泣く友になぐさめもなく涙わく
沈黙は金なりの重みわかりかけ
姑は年の功をもひっこめる　和歌山市　堀端　三男
高言を吐いて逃げ腰ちらつかせ
転落の歯止めになった独楽の紐
禍ちを改むるにも憚られ　新宮市　辻　弐
やすらぎを枕一つに託す妻
定退の路に真赤な落椿
天運を祈る字画の辞書をひく　尼崎市　中谷　利美
老いて子に従いたくはない貯金
早よ飲んで寝ろとばかりな妻の酌
荷物にはなるまい子等も食うてちょん　唐津市　田口　虹汀
苦も楽も皺に蔵めて円い古稀
黙々と燃える線香見て励み
片目のだるまショックと共に座し　唐津市　浜本　久仁於
生活が服の裏まで滲み出る

日本列島遊べあそべの五月晴れ
御神輿を擔げば博多の夏になり　島根県　木村はじめ

古稀にしてまだ息子等に頼られる
借金も預金もなしで恙なし
主義主張通して会社の足洗う　出雲市　園山栄

この胸に嘘をかくまう隙がない
流されて流れて日々を生きる知恵
煩悩を洗えば逆う風となる　出雲市　吉岡きみえ

日没を惜しみて農婦土をふむ
働いて帰る足音とても好き
直前に亡母がくちにした枇杷熟れる　寝屋川市　小林鯛牙子

クルーガーそこ退けそこ退け江川が投げる
仲間でいたい二次会へ行く
根回しとは気がつかなんだプライバシー　東予市　小山悠泉

哀愁とロマンが残る別離の譜
末席の意見今度も押えられ
水に流し度い過去を他人がほじり出し　青森県　波ただお

先生をやめて先生の味を知り
ストレス解消蹴る石もない舗装道

ワタアメで宵宮の味を噛みしめる　島根県　松本文子

雨を待つ砂の渇きに似た夫婦
さりげなく交わして傷に泣く夜も
捨てられる同じさだめと花は云う　寝屋川市　高田てまり

辻褄を合わせる嘘へくしゃみ出る
泣き言を云わない母の指太き
母の手が我家の歴史語ってる　呉市　玉木志恵子

娘より嫁の看病ありがたし
下積みの母の責任つきまとい
信ずれば鈴が心に触れて鳴る　竹原市　古田鈍舟

ドラマなら涙をふいてすむものを
縁の糸悲喜それぞれにあやつられ
孫のような吾子の誕生待ちわびる　吹田市　藤原世史春

逮捕状もうサンづけはしなくなり
怖いのはサラ金よりも借りる無知
ご免とも云わずに間違い電話切れ　大阪市　津山刀水

あくる朝おんなの顔に眉がない
人混にだまされそうに歩いてる　岡山県　二宗吟平

あせるから四方八方すきだらけ
転出ときめて淋しい夜の目覚め
鳥取県　羽津川　貴之

根性のない子の歯並び立派すぎ
電化製品揃えて井戸のあるゆとり
泉佐野市　大工　静子

四十五年ふる里へ義理もうすれ
土なじむ指　手さげの下にかくす
今治市　新居田　胡頽子

教室に明るさ放つ更衣
足掬う楠葉に素足心地よし
呉市　山根　里香

言い訳はすまい心が濁るから
青春のポーズ詩集を抱いている
鳥取市　中森　葉士人

銀婚の夫婦お互い誤算だと笑い
冷え切った言葉と向い合う正座
大阪市　本多　俊子

四国の旅

石平寺の冥土の音も聞いて見る
子規堂の短冊読めぬまま戻り
今治市　矢野　佳雲

冗談へまさかと言うたのが当り
高飛車に出た日の虫のおりどころ
岡山市　井上　柳五郎

名物のさぬきうどんも土産の座
張り切って出て疲れ蓄め旅帰り
兵庫県　川井　白峯

病床にて

倒れてより早や三ヵ月衣替え
手術台静かに上り無我の境
旭川市　朝倉　大柏

当然のように次男も反抗期
胸ポンと叩いたほどに頼られず
倉吉市　野中　御前

ケロイドの重荷背負った白い杖
新築のローン蝸牛のよう背負い
倉敷市　中島　彩平

旅心自制を揺する灯が媚びる
髪染めて五十路へ女捨て切れず
岡山県　岩道　博友

低姿勢続けて主義の無い男
気に障る便りが好かぬ名で届き
山口県　高崎　雀声

生きていてよかった老の同窓会
満員をくぐりぬけきたよな土産
東大阪市　三宅　哲夫

気にすればする程騒音高まりぬ
すすり泣く声が夜半に襖越し
羽曳野市　麻野　秋畝

脈を取るナースに温い手冷たい手　羽咋市　三宅ろ亭

梵鐘の余韻迎え火揺れるなか

一升の酒は二人を黙らせず　橿原市　西本保夫

水盗む百姓もあり村は夏

嘱託がかつての部下に使われる　島根県　佐々木裕

会社の門出れば嘱託背伸びする

かすがいに嘘も方便使って見る　米子市　野坂なみ

妻の意地踵の減った靴に見せ

灯を消して今日一日の愚痴を棄て　鳥取県　石井雅水

裏絹の渋さで映える裾模様

省エネがわが晩酌へも打ち寄せる　唐津市　桧垣岩光

無い袖も振らねばならぬ明日が待ち

汚された港文化の悪夢かも　唐津市　桑原掬治

放談に耳をあずけて雨に寝る

唐津城観光一役かって立つ　唐津市　山下勝一

佐用姫が悲恋哀れや松も枯る

心にもない世辞云うて喜ばせ

役得とただ酒新入りすぐ覚え　倉敷市　大森登竜

親切に見え隠れする下心

ライバルが逝って変った酒の味　島根県　星野侑正

役人の数不況をよそに増え

定年が延びそうマラソンも続けよう　松江市　竹内寿美

笹巻きは矢張り母の出番です

ウエスト線崩れ女が妻となる　諫早市　江副二牛

愛の目覚め乙女の胸に風が鳴る

どん底で度胸を決めた立ち直り　大阪市　田口なりこ

遠い父　年経て近い父となる

鉢いじる父の手許に齢を見る　出雲市　石倉芙佐子

紙風船夢の少女が追っかける

背伸びして青いリンゴの実を齧る　羽島市　時田誠一

荒れた海今日は私に似合ってる

神様へ理由が聞きたい事ばかり　今治市　渡辺南奉

うち子だけ叱りうちの子腑に落ちず

産油国の強気地球がゆさぶられ

女から母へ小太りしたゆとり　鳥取県　加藤茶人

算盤ではじけぬ答を持つ若さ　鳥取市　武田帆雀

幸福がいっぱいエプロンまで白い

名産という伝統に歯がたたず　京都市　松川芳子

喜寿すぎて世話やく母でいて呉れる

朝顔の双葉出揃う朝を出る　島根県　山本博也

思い出に優しい母の小さい嘘

朝顔の蔓も仕合せ求め伸び　岡山市　串田句昧地

崩れてはならぬ心を抱いて寝る

ゆく道はひと筋地下足袋はいてゆく　出雲市　板垣夢酔

茶碗むし母の温みが手から来る　鳥取県　和井観洋

油注ぎ合うて夫婦の炎が温い　広島市　すがかつこ

ありがとうを売りまくった日の喜劇

旅帰り心ははずむ故郷近し　倉吉市　田民碧水

後添いが来てから休み癖がつき　小松市　馬場魚山

その度に老いたと思う物忘れ　倉吉市　一風庵

ぼくだけの百点父さんが取りあげる　鳥取県　和井貴久

話しただけで了解得たつもり　愛知県　池田香珠夫

カッコウが啼けば逝きし女恋しくて　八戸市　島田昭治

戒名を予約それから元気が出　大阪市　平井露芳

青空は入道雲の向うなり　島根県　岩田三和

きき耳を立てて縁談さぐり合い　米子市　青戸美佐

箱庭へ永住する気か雨蛙　寝屋川市　立床晴風

生き甲斐に始めた道に病みつかれ　兵庫県　高橋近郊

脊身の息子へ蔭膳絶やさない　大阪市　内藤ますえ

イラ立つ日廻りが遅い洗濯機　尼崎市　中辻千子

金も無くバーゲンセールを見て歩き　唐津市　浜本義美

尼崎市　小林文月

入梅と聞いて気になる屋根の漏り
尾鷲市　渡辺伊津志

大国も我が家も所詮金で揉め
佐度郡　高野不二

云いたい事云うから言葉つきささる
羽島市　伊藤静枝

梅酒瓶のぞく日課の老の役
尼崎市　中塚喜甲

済みませんと云うは弱者の生きる知恵
豊中市　田中善四郎

庭先きの話座敷へ上がり込み
大阪市　藤森小雅子

サングラス似合う女のエトランゼ
今治市　和田宏

手形・手形中小企業波ばかり
青森県　五十嵐操史

転換後行動高く評価され
枚方市　栗林光夫

どうでっか、ぼちぼちでんなで意が通じ
和歌山県　北浜二郎

毎日が家庭の日です老い夫婦
岡山市　花田たけ志

気短かを曲った釘がもてあそぶ

★

大州市　**米沢暁明**

またもとの無口に返す酔がさめ
お天気をうっかり褒めた水不足
お隣りへ聞えるように子の自慢
ほどほどと仰言る肚をよみ兼ねる
服の柄妻に任せば少し派手

岐阜市　**市川鱗魚**

齢きいてこれは失礼では済まず
針坊主妻の座ったこの辺り
兵隊の父でぬけがらにもなれず
黄八丈二夫は迎えぬ京のれん
よじ登る肩がき嘘が破裂する

第三回全日本川柳大会記

西尾　栞

昭和五十四年六月二十四日（日）、梅雨の最中とは言え、素晴しい好天であった。土佐堀河畔の柳の緑は河面をおおい、中之島公園の樹々は鮮やかな新緑であった。

十時開場の準備に、九時過ぎ十数人の人達が今度新しく出来た臙脂に白抜きの日川協の手旗を中心に集った。会場設営は、一部事前投句があった為、会費既納者と未納者を分ける煩雑な受付の割り振りに、番傘のたつおさん、塔社の鬼遊さんの御苦労は一通りでなくそれでも大会に慣熟しておられる両人はテキパキと指示され、各コーナーの準備も見る見るうちに万端整い、受付の方達の体制が出来上った時には、大会委員長中島生々庵氏の顔は満悦と安堵に輝やいていた。

最初、大会の司会は西田柳宏子氏を予定していたが、氏の突然の病気の為、急遽村田瓢太氏にお願いした処、心良くお引受け下され純白のスーツを着て胸につけられた日本川柳協会の赤いリボンが映えて、司会のマイクに立たれた時は、大会気分が横溢して愈々今日の大会の盛況を告げるようであった。

会場の中央公会堂は、御承知の通り素晴しく立派な建物ではあるが冷房の設備がなく、大変心配していたが、天井の高い事と周囲の窓を開け放つことによってその心配もすっかり解消された事は洵に幸であった。

午前十時、出足の良い出席者の為、受付は記念品渡し、食券渡、句箋渡、照合等で天手古舞であった。でも各社よりの応援の方々の応待も鮮やかにさばかれて、久しぶりの挨拶も和やかに各地の出席者の顔で座席は埋められて行った

十時半、小ホールに於て、前夜より泊り込みの各地からの理事、常任理事、六十七名によって議事審議がスムースに行われ、無事閉会となり、愈々一時五十分より川柳大会が華々しく左記スケジュールによって開催された。

大会次第

第一部　司会　村田　瓢太
開会の辞　磯野いさむ
大会委員長挨拶　中島生々庵
入選句発表
大賞並に大会賞発表　西尾　栞
授　賞　日川協理事長　片山　雲雀
閉会の辞　久保田寿界

第二部　懇親会（六時、食堂に於て）
乾　杯　部長　岸田万彩郎
万歳三唱　片山　雲雀
中島生々庵

入選発表の脇取は四名のうち、たった一人の女性、定評のある田頭良子さんの美声はホ

ールにこだまして一同を魅了した。

尚、大賞決定については、各題の大会賞の句七句を、雲雀、生々庵、東洋樹、不二也、蓮夫、風柳、主祐の七氏によって無記名投票を行い最多数（三票）の句を大賞と決定した。

右の写真は懇親宴風景（右端生々庵大会委員長）
左は披講風景（右端橘高薫風氏）

写真「川柳」提供

入選句本社関係一部抜粋

「天」　**藤島　茶六選**

天の助け乞うた日もあり浮き沈み　操　子
十字架を背負って天に逆らわず　としよ
天地神明に誓い政治家嘘をつき　綾　女
針の孔から覗いても天は天　古　方
恩を知るおとこに天が深くなる（大賞）冬　二

「地」　**岸本　吟一選**

地に還る事も出来ない化石です　まさ子
大地と暮らす男梅干好きになる　雀踊子
地の果ての果てなる園か夕陽燃ゆ　翠　光
地下水の流れに誰も逆らわず　保　夫
地の愛を朝顔の芽がしゃべりだす　幸
地に落ちる度胸をきめた果実たち（賞）鎮　彦

「人」　**山田　良行選**

人間をこんなに変えるアルコール　日　満
人がひと裁く乾いた風の音　幸
人前を照れて旅立つ父と母　英　子
鳴る鈴へ逢わねば遠き人となる　寿　子
笛吹けど踊らぬ人にある仮面　紫　香
一条の煙ここにも人が住み　敏
人のよい顔をしている知恵おくれ　小松園
保育器の掌人権を主張する（賞）柳太郎

「本」　**橘高　薫風選**

莫迦になる本も私の部屋にある　夕　花
割り込んで掛けて本読む肱をはり　潮　花
一冊を著して不朽の人となる　規不風
本読みのすでにヒロインめいてくる　宇宙太
本を積む職人詩人に尚成れず　静　水
古本屋の棚で見つけた鬼の首　鬼　遊
安らぎや経本の紙魚潰さずに　太茂津
本棚は西陽を浴びて不遜なり　道　夫
愛情のしるしに贈る本を撰る　智　子
一冊の本より軽きペンネーム　雀踊子
原書読む女冷たいプロフィール　翠　光
それぞれの絵本大人の毒がある　寿　子
悪人の遠い記憶にある絵本（賞）勝
父は本を子はレコードを抱き戻る（軸）薫　風

「時事雑詠」　**大森風来子選**

中年に通天閣の灯がともり　智　子
票をにらんで考えるエネルギー　古　方
サミットの沸騰点を見ていよう　君　子
省ルック女は神代の昔から（賞）良　重

「みどり」　**尾藤　三柳選**

母となるみどりが山の中にある　岳　人
風はみどりで一気に女になりたがる　君　子
一枚ずつみどりを脱いでゆく少年　夕　花
黒板のみどり少年は風邪気味で　道　夫
市場篭弱い男へみどり買う　鬼　遊
楢山にみどりが少しずつ増える（賞）作二郎

「心」　**去来川巨城選**

親ばなれ子ばなれ雲は心に澄んで来る　小松園
まん丸い心で明日の米を研ぎ　宇宙太
喜んで欲しくて重い荷を担ぐ　弘　生
悟り切る今朝の心にキャベツ剝く　静　歩
後尾ほど心はまるいデモの列　十郎
武家屋敷白い心が置いてある　岳　人
さもしい心で茶菓子の蠅を追う　静　水
もう一枚の紙に心伏せてある（賞）白　兎

（高杉鬼遊）

愛染帖

橘高薫風選

自画像に魂入れる顔の皺　富田林市　中村　優
恋文にしこり残さぬボールペン　兵庫県　辻　文平
ナイフが錆びている死なないことにする
妻の掌の冷えを握って憩いけり　高知市　西川富恵
風が止む仕返し一つできないで
夏語るとき向日葵の金の色　倉敷市　田垣方大
ほほ笑みに拒絶があって近寄れず
抓んだらふり向きそうな裸婦の像　寝屋川市　江口　度
渦潮を見てる明智探偵も
藤棚をぶどうにかえた銭メスめ　島根県　木村はじめ
水すまし池の深さをまだ知らぬ
爺ちゃんが死んだら部屋を呉れと言う　尼崎市　黒川紫香
流れ星次の宇宙へ飛ぶ様に
ローマ字があるから駅の名が読める　岡山市　川端柳子
わかってはくれない人へ流れ星
スナップじゃ何の苦もなく笑うけど　富田林市　岩田美代
雨は絹何とやさしい日をくれる
確答をさける日傘は深くする　大阪市　小出智子
忘れやすくなってわたしを取戻す
お隣りの犬も他人にちがいなし　米子市　八木千代
遅刻した足も定時に退社する
病室へ月も祈りの影を投げ　堺市　高橋千万子
はなやかな過去を包んで黒が好き
履歴書に書かない過去は顔にあり　八尾市　宮西弥生
雑兵の焦りを静める湖水です
水に流そうそんな逃道だってある　尾鷲市　渡辺伊津志
生きている海が息する大うねり
目礼の眼元誰かに似た記憶　倉敷市　水粉千翁
窓を開けましょうご無理も聞きましょう
ほっぺ抓る痛いうれしさだと思う　愛知県　池田香珠夫
驟雨去って釣舟もとの位置につく
文楽の飛脚はまこと宙を飛び　川西市　戸田古方
判官びいき私のどっかにもあって
ネクタイの色がちぐてた同じ柄　竹原市　古谷節夫
海の詩瀬戸に夕陽のある限り
染まらない色一つ持ち小商人　山口県　高崎雀声
赤字でも賃上げストの出来る国
ギャンブルに天皇の名をお借りする　八尾市　高橋夕花
父の愛を独占しているさくらんぼ　高知市　宇佐美和子
道行や眼に菜の花は花盛り　鳥取市　中森葉士人
妻と子を背負うた靴が片減りす　兵庫県　野々口ゆう也
濃淡の夫婦五十年溶け合うて　大阪市　神谷凡九郎
丸描いてチョンで人生終らない　倉敷市　中島彩平
夕刊に爪を飛ばせて職がなく　倉敷市　小幡里風
十字架を背負う足音だと思う　大阪市　津山刀水
影ひとつ連れて流転の一生か　倉敷市　藤原桜山
なお弥陀に迫れぬ塔の高さかな　岡山県　岩道博友
栄転の友が罠を仕掛けて出　和泉市　西岡洛酔
単純な手相凡人の域で居る　高槻市　若柳潮花
散り際の姿を花も見まいとす　大阪市　河野君子
それでも父臑を抱えて満ち足りる

今治市　矢野佳雲
草の名を知れば草から笑いかけ

鳥取県　和井観洋
クシャクシャにされて恋文また疼く

青森市　工藤甲吉
ひぐらしの鳴くひとときをあわれとも

和歌山市　松原寿子
罪ひとつ蓮の白なら愛せるか

三重県　坪田冬花
音だけが取得我が家の古時計

大阪市　藤森小雅子
一巻の写経を隠れ蓑にする

和歌山市　西山幸
茄子のいろ今日も生きてる愛しさよ

島根県　榊原秀子
ガラス器が冷やかすぎる梅雨の雨

町田市　竹内紫錆
ドアの内笠の内めき電車去る

大和郡山市　森田カズエ
ミキサーに入る苺と盛る苺

鳥取市　河村日満
矢印がなくても新居すぐ判り

鳥取県　鈴木村諷子
年かさと言うだけ他に何もなし

米子市　小西雄々
楽をして飯を食べたいプラカード

岡山県　二宗吟平
待ちあきたとこで急用思い出し

兵庫県　遠山可住
大陽が好きな女の笑い声

寝屋川市　柴田英壬子（恵美子改メ）
金庫店ビルの谷間でまだ死なぬ

京都市　松川杜的
鐘楼は動かず五月の青い空

新宮市　大矢十郎
もの言えば金要る話四女五女

和歌山市　若宮武雄
シャネル五番ふっと翔びたくなってくる

和歌山市　湯川頼次
病身の母より見舞電話受け

今治市　越智一水
女は海男は舟よ漕ぎ渡る

今治市　月原宵明
蝸牛雨のち晴へ角かざす

八尾市　高杉千歩
良縁をたのむ故里花手桶

八尾市　渡辺章
ついに世を拗ねて見せたき親しさに

名古屋市　大林曲ん手
天の声尺取り虫の背を叩く

島根県　佐々木裕
勤めする妻のバッグは秘密めき

島根県　堀江正朗
蛍飛ぶ頃か想い出むなしくて

尼崎市　小林文月
借家にも晴耕雨読の語は通じ

大阪市　江城修史
花散るや孤高に逝きし墓の上

松山市　谷信夫
朝霧の中ゴム長の人が出る

藤井寺市　児島与呂志
納棺と同時に浮世の火が燃える

米子市　佐伯越子
口止めをしたのが先に口を割り

唐津市　浜本久仁子
生活が服の裏まで滲み出る

羽咋市　三宅ろ亭
逃げ口を塞いでこれでもかこれでもか

島根県　堀江芳子
祝婚歌子の倖せになぜ泣ける

兵庫県　中田白李
うな井の飯一粒も残すまい

青森県　五十嵐操史
躓いた石に転換誓わされ

八戸市　小泉紫峰
後手後手とまわる溜息労われ

島根県　飯塚虎秋
底辺へ歯切れのわるい衣替え

小松市　馬場魚山
学校のチャイムで団地日が昏れる

八戸市　島田昭治
もう妻は僕より花がいいらしい

寝屋川市　宮尾あいき
ピンク色に咲いてアジサイ雨知らず

和歌山市　坂部紀久子
出掛けに鳴る電話スリルを意識する

米子市　野口美世
五十坂越えたゆとりに趣味が待ち

東大阪市　竹中綾女
孫八人心に温み湧き立たせ

島根県　栂みどり
雨後の陽がたたきつけそうな物干場

大阪市　白石潔

故郷にゴルフ場出来バーもでき　堺市　伏見茂美

娘へ電話油断できぬぞ彼氏かな　東子市　小山悠泉

人並で良い人並によう生きず　和歌山市　福本英子

デジタルに秒針のロマン消えるのみ　西宮市　朝山千世子

性の神秘真昼のテレビで聞く世代　岡山県　出原敬一

病む碁友にずっこけの蘭よろこばれ　米子市　青戸美佐

訪うたびに笑みたおやかな伎芸天女　貝塚市　行天千代

女一人手綱締めつつ生きて行く　橋本市　森脇善太

紫陽花に別れの美学練る女　倉敷市　藤井春日

毒づいて女あとからよよと泣く　島根県　大森孝華

初孫の香りしみじみ春を吸い　羽曳野市　麻野秋畝

復員の過去ありワンタンチャーシューメン　神戸市　来住タカ子

安逸に慣れた男の生返事　岸和田市　古野ひで

観光へ重たい心の真珠湾　唐津市　新岡回天子

大学出をあごで使って無学なり　島根県　西村早苗

ラーメンをつめ込み扇風機がほしい　高知市　山下登

起工式幣に春日の降りそそぐ　大阪市　藤田頂留子

昼下りベランダごしの立話　唐津市　桑原掬治

初夏の風素顔の女の髪を撫で　京都市　都倉求芽

旅の夢旅の枕で見た湯音　出雲市　高橋可保留

風呂焚いて勤め帰りを待つ余生　兵庫県　川井白峯

病床に作句の出来る有難く　岡山市　花田たけ志

よく眠る妻でよかったとも思い　唐津市　田口虹汀

普請場へ作法無用のお茶が来る　鳥取県　羽津川貴之

番付に載った歯医者で昼が過ぎ　和歌山市　内芝としよ

帯締めて日本の女の腰になる　大阪市　川口弘生

小さい鼻天井むいてる愛らしさ　岡山市　清水金太郎

見合するどちらも多く期待せず　京都市　山本規不風

満期来る今日の恵方は銀行か　出雲市　園山栄

戦争の過去をひろげる世界地図　唐津市　桧垣岩光

バードウィークテープに小鳥拾って来　鳥取県　石井雅水

鎌鍬も錆びて内職以下に落ち　唐津市　山下勝一

負け犬が一声吠える捨てせりふ　唐津市　岩崎実

庭下駄が待ってたような月朧　岡山県　池田半仙

土地訛生活にマッチしたテンポ　大阪市　欄蘭

元号と戦争すぐに結びつけ　岸和田市　清野こう

詫びられて長く待ったと言いそびれ　今治市　新居田胡頽子

決心がついて開いた重い口　倉吉市　田民碧水

作句して心の翳り覗かせる　倉吉市　野中御前

聾唖者にうれしい自動販売機　羽島市　時田誠一

歩けるは杖をついてもただ嬉し　岡山市　串田句味地

頼りない柱の後を妻が押し　羽島市　伊藤静枝

山菜取り家族ハイクですこやかに　島根県　山根峰雪

病む姉に筆まめに出すくに便り　出雲市　高見鐘堂

御仏へ真剣勝負の願いごと　鳥取市　武田帆雀

連名を外れ羽振りの一枚板

☆投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13―15
橘高薫風宛（ハガキに三句以内）

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

正本水客

筍めし二合でたりて老夫婦　杉浦婦美子

足るを知る年寄り二人だけの暮し、遠い昔に返った淡々とした幸せである。

丹精のばらのようには炎えぬ齢　高橋　夕花

大事に大事に育てたバラの大輪、真紅に炎えた昔を懐しむ心はあっても現在に不満はない、中年の安定感がそこにはある。

四季の花咲かせ一軒立退かず　黒川　紫香

近頃のけわしい世相を上五で美しく飾って時の移りをえがいてみせる。

くらしの掌拭いて五月の貌と逢う　岩田　美代

くらしの掌と云う適確な表現に対して、五月の貌と安易に所謂川柳語で受けたのが何とも惜しい気のする句である

苺つぶす女の嘘が美しい　藤村　〆女

少し作り過ぎの気もするが流石にうまい。

暇つぶしみたいなこともいうガイド　戸田　古方

句主久々の九州紀行、実感でなければ出て来ない句であろう。

子の画いた向日葵　母の顔をもつ　槇田　英詩

クレオンで紙いっぱいに描いたひまわり、この場合の母の顔は動かない言葉である。

眼を閉じてごらんよ海は喋ってる　時広　一路

暮れなずむ海に向って、じっと眼を閉じていると海の声が聞こえる。海は何を教え何を訴えようとしているのだろうか。

この角を曲れば幸せありそうで　川崎　秋女

それが人生というものであろう。

静寂のきびしさを見た冬の枝　阿萬　萬的

南画展を見ての作品であるが、静寂のきびしさとは、冬の枝に対する句主独特の感覚である。

財布には入れぬ拾うた百円貨　大矢　十郎

百円硬貨ともなれば踏んでゆく訳にもゆかず、財布の中へ入れる気にもならない。ウン分る気がする。

親も子もやがては独りねぎ坊主　納　糸葉

子供はやがて一人ひとり巣立ってゆく、ねぎ坊主の措辞は適切。

歩くのも日課　時間を極めて留守　市場没食子

健康のため毎日、時間を決めて歩いている悠々自適の余生が偲ばれる。

ふる里に地酒があって父があり　樫谷　寿馬

別に新しい発見がある訳ではないが、地酒があって父がありと畳み込んだ句調で、何となきムードをかもし出していて捨てがたい。

先頭で汗を拭くひまなく走り　岸本　無人

トップを切ると云うことは風圧を受けて非常に走りにくいものだと聞いているが、人生の一駒を見せられている気もする。

ジャンケンのルールで遊ぶ子の平和　小幡　里風

大人も世の中も、また国と国との間でも、この調子でゆけばどんなにいいだろう。ただ下五子の平和と説明しないことが望ましい。

眠りたいときに眠って妻老いる　川村　映輝

妻老いるの下五に老夫婦の愛情がしみじみと感じられる。

人目にも慣れて気軽に車椅子　牛尾　緑楼

足の不自由な人々は何か恥ずかしいことの様に家に閉じこもり勝ちだったが、近頃は駅のホーム等でも明るい顔を見るようになったのは嬉しい。国会へ車椅子の門戸を開いて呉れた八代英太さんに敬意を表したい。

川柳句集「地下鉄」私見

菊沢小松園

児島与呂志著

私は今、一冊の川柳句集に対している。すっきりとした垢抜けのした瀟洒な本である。贈られたその日、新しいものの生ブ毛に触れる思いで両手で撫でてパラパラと頁を繰って見たが、何故か文字や句は眼にその時は入らなかった。新しい希望のものを手にした子供が嬉しさの余り、そっと遠くから眺めているような気持ちで楽しさが一杯で気になりながらその日は到々、読まなかった。

希望と期待とに胸を震わせながら二三日を過して落ち付いた気分で、「鉄下鉄」に対したのであった。それが今である。

私が想像した通り、川柳らしい川柳が並んでいた。日常誰もが見、経験し、思い、考えていた市井の平凡な一市民の生活がよく浮彫りされていた。それ等の句の一つ一つに、突飛さや衒気さは無い。共鳴される多くの場面はあっても、悲憤慷慨の劇しさは無い。この句集の序文で生々庵主幹が述べておられる温かい文章で与呂志個人に就いては要を尽されて居るので重複の煩は避けるが、私も長い川柳雑誌社以来の交際でよく知って居るが、責任感の強い、小回りの利く何事も安心して任せられる人物の一人と思っている。

影日向の無い生真面目さは、彼を知る誰しも思っている処で、この種の人達が増えると世の中も大変明るくなることと思っている。

近頃の或る一部の川柳先駆者を自負して居る人達のように、雲上の龍に煙を吐かせて荒唐無稽な人間に何の関係の無さそうな語句を使って、やがて自らその煙の中に酔うているような生硬な難解な句を発表して、皆んなこれが判るかいと示す、判らぬとでも謂えば、それは勉強の足らぬとほざく、この始末におえぬ人達も、そもそも人間というものの発生経過は地球というものの冷却過程の程度の都合で生れた敢て湧いたとは言わぬが、足は地上を離れられず、躍り上っても知れたものでそう長い空間の生活はない。そこは限られた人間の生活である。それを充分心得た与呂志川柳に突飛さはない。鬼面人を恐れさす山気は更々ない。雲は飽く迄、地上から見た流れる雲であって、決して飛上って雲へ突込んで詠む冒険さは彼には出来ない。ケレン味のない性格は万事人を押し除けてまで華やかさを好まない。長い年月のこつこつ実践の積み重ねで過去の経歴がそれを物語っている。

この句集の何の部分にもそれがよく判る。身辺雑記的な日常生活に触れた生活川柳が多い。一部の思い上った川柳人にあり勝ちな妙に一種の悟りがかった独りよがりの自負心というか、何とはなしにより以上に自分を発散したがっているような、物知り顔の偉らさ加減を彼からは微塵も感じない。徹底した平凡人であり、これが本当の意味での川柳人であるかも知れない。

古川柳に「叱られて叱られ振りのよい女房」というのがあるが、この「地下鉄」を見ていると、失礼ながら叱られぶりのよい亭主の景趣も窺える。この意味では与呂志も非凡なる凡人と言えるかも知れない。何事にも独りよがりの半可通の人間の多い世の中に器用さを売り物にしてその実体の伴なわぬのが多いのに、この徹底した凡人振りには、いつも感心している。そこに掬み切れぬ深味もあり、人間味もある。

人間の屑になるまい世を生きる

今年また制服のままの三ヵ日

子沢山市電で行ける花に決め

車掌台でっかい乳房も寄ってくる

豚まんのにおいも乗せた満員車

この句集の何の頁を見ても、近頃一部で流行している神懸り川柳や高踏魔呵不思議な神霊的な川柳の匂いもない。これから川柳を初められる人達に見せても恐らくよく判るだろうし、難解な句はそうあろうとは思わない。そして川柳が持つ面白さは充分伝えて呉れると思う。洪笑爆笑の派手さは無くとも川柳が持つ独得の微苦笑は随所に見受けられる。誰にでも、安心して推奨出来るよい句集として推選する次第であり、一人でも多く読んで欲しいと思う。

とことんのとこは妻の口に負け
妻からの電話洗たく入れなさい
猫の子のような訳にはいかんやろ
実印を妻が握っていて平和
除夜の鐘聞きつつ夫婦酒にする
春誘う言葉になって女の目
招待券使用ぎりぎりになって呉れ
無芸まず座わる位置にも気をつかい
かんじんのとこ破れてた女文字
他人さんの事に走れる子に育ち
苦しみを二分の一で来た夫婦
行きずりの路傍でなだめ役にされ
云い過ぎた言葉をそっと探してる
大阪の足勤めてきた誇り

★

地下鉄刊行祝吟　（順不同）

大阪蟲屓建樹も与呂志も市電から　小松園
刊行のかげに娘がいる妻が居る　潮花
一生の想い出となる句集成る　淡舟
温かさ伝える句集に湧くはげみ　佳加志
半生を句集にかけた晴れ姿　希久志
高峰も一歩一歩の積み重ね　真佐志
漕いで来た海の新たな舵をとり　比呂志
川柳に滲む仕事の汗のあと　大也
柳心が胸うつ様に聴こえる日　勝
風雪を語る句集の筆のあと　与史文
師のひかり求め同志の道開く　実
お人柄匂う句集の肌ざわり　静水
女を泣かす駅の時計は正確で　雀踊子
どの句にもどの句にも君の息づかい　形水
定年へ妻の伴奏あればこそ　徹舟
人生を三分法にして遊ぶ　芳川
のりかえは地下鉄だった男旅　弘生
地下鉄刊行よしかなよろしかな　あいき
栄光を温め夫婦の道をゆく　寿子
ふりかえる道にいつでも妻がいる　重人
川柳に生きて世間に幅ができ　秀峰
好きな娘を笑顔で乗せる縄電車　鬼遊
改札を出ればさくらの別世界　酔々
地下鉄へ白雲光る初夏の空　幸
地下鉄の足音がする父のもの　千寿子
のりかえもなく三十年の足運び　太茂津
風車素直なまわりようをする　古方
老眼はくもらず視柳は一直線　好郎
生き甲斐は男同志が信じ合い　生々庵

★

（前号訂正―野村太茂津氏は三十冊買ってくださいました。与呂志）

▼句集「地下鉄」限定五百部売り切れました。
ご支援ありがとうございました

川柳塔社

川柳塔社常任理事会（七月二日）

各地を襲った大雨―皆様はご無事だったようですが、まずはお見舞い申しあげます。

きょうは生々庵主幹の八十一回目のお誕生日である。ご令息やお孫さんらとお祝いをされるため会議の進行は急ピッチをあげる。

本年は市の文化祭川柳大会の当番、本社役員の改選がある。八月・九月から秋へかけて選者諸氏はまた各地へ招かれて行く。

日川協第三回全国川柳大会の反省など、日川協の話になると生々庵主幹と栞副主幹は熱を帯びてくる。

多久志氏の「続・老いの坂」は七月六日の句会で一般諸氏にお目見得する。（発行者は若本多久志氏。送料共で千円―本社でお取次ぎします）

出席―多久志・水客・紫香・潮花・古方・百酒・柳志・形水・栞・萬的・生々庵・薫風・与呂志・岳人・一三夫。（敬称略）

氷

渡辺菩句選

氷枕とれて看病疲れ出る　綾女
宇治金の好きな親子で今日も来る　虹汀
手術後の妻が欲しがる氷水　御前
孫が来て氷が足りぬ冷蔵庫　素身郎
商魂は氷河のオンザロックとか　どんたく
かき氷電気でけずる味気なさ　カズエ
食べていぬ子が一人いる氷菓子　天彦
氷呼ぶ声が露店を派手にする　代仕男
水晶に見たてた氷で乾盃し　比呂志
越冬隊凍ったひげもうつされる　悠泉
氷菓子売る店見つけて妻と来る　規不風
なれそめは天神祭のかき氷　道子
氷屋のねじ鉢巻は汗に濡れ　義美
氷山の一角でしょう五億円　掬治
かき氷女の会話はずませる　雅水
氷嚢に母の慈愛も詰めこまれ　軒太楼
氷山の一角ぐらいで汚職すみ　弘朗
古きよき時代であったかき氷　方大
腹割った話に氷の角が取れ　洛酔
カチ割りが一番人気の甲子園　勝美
氷会社に勤めて夏を暑くいる　魚山
はったりを見せたが氷踏む思い　春日
氷山の一角くびになってケリ　本蔭棒
芸術の手で白鳥となる氷方　大夢酔
人生は氷の溶けに似てわびし　七面山
氷柱のような皮肉が僕の耳朶を打ち　登美也
かき氷旗も涼しい色で立ち　南奉
氷のような冷たさ愛がなお慕い　佳
逆もまた真なり氷の逆療法　茶人
氷のような人と言われて名検事　悠泉
日本一うまい故郷の氷水　伊津志
脳天に氷の欲しいこの暑さ　弘朗
かき氷夜店の色をかけてくれ　博友
氷から湯気の立つのを不思議がり　人掬治
お金では溶けぬ氷が胸にある　地可住
ストローに逆っている割り氷　天可保留
胸に氷嚢して作った笑顔して　軸

ハト派

大矢十郎選

妥協する道を探しているハト派　一路
結局は議長ハト派に頼ってる　不二勝一
損得になればハト派も鷹のよう　秀村
ハト派なり世界平和を夢に見る　岩光
定退式ハト派のままで見送られ　天彦
じっくりと出番を待っているハト派　優
妻と母なかのハト派で気に召さず　七面山
ハト派だと言った男がストをぶち　保夫
居眠りのハト派も賛成だけは立ち　素身郎
金ができはじめてハト派寄りになり　どんたく
妻はタカ僕はハト派で無事な日日　満津子
年輪か父を鳩派の貌にする　句眛地
軍拡へハト派警鐘うちつづけ　比呂志
選挙前ハト派のポーズで飛び歩き　御前
五ツ児もタカ派ハト派の玩具とり　恵美子
つり皮を握るとハト派の顔かくれ

腰抜けのハト派だったらやめてほし　方大
天国でも老夫婦のハト派くずすまい　テルミ
長生きをしたくてハト派の群にいる　枯梢
マアマアとハト派に主導権とられ　武水
そうはさせじとハト派立ち上がり　暁明
そんな気にされたハト派の気の弱く　彩平
豆つつく程の嘴持つハト派　佳雲
過激なる理論をハト派受けながし　回天子
ハト鷹と狭い日本に住み乍ら　虹汀
ご主人の方がハト派でつつがなし　本蔭棒
家中の幸せ妥協して守り　胡頽子
札束を読む指ハト派など忘れ　刀水
母のヒスハト派の父に鎮められ　道子
交際が上手ハト派にある人気　伊津志
大物のハト派が裏で糸をひき　越子
反潑が恐いハト派の隅に居る　可住
さりげなくハト派火をふく意地をもつ　みどり
泣きに行く里にハト派の母が居る　南奉

佳

昇格の日からハト派となる保身　軒太楼
ハト派の夢が破れたら君どないする　古方
政略へハト派も強行意見出す　春日
ハト派にも汚職の中に名を連ね　綾女
ハト派にも片隅にあるタカ意識　凡九郎

人

ハト派とて鷹で羽ばたく術も知り　代仕男

地

どん底に耐えてハト派の子に育て　弘朗

天

定年へ鳴かず飛ばずで来たハト派　悠泉

軸

要求へハト派顔色変えただけ

ルーツ

森下愛論選

ルーツいっぱい古い民話のなかのこと　きく子
一族のルーツを墓に書いてある　刀水
ルーツばやりに我が家の系図出して見る　七面山
騒がれるルーツはなはだ迷惑し　夢酔
一片の土器から民族のルーツ解く　春日
茶畑の墓誌はルーツを語りだす　カズエ
ルーツの血原野に残す目鼻だち　どんたく
日本のルーツを覗く古都飛鳥　胡頽子
人間のルーツが猿という喜劇　佳雲
西安に白磁三彩見るルーツ　勝美
たどりゆく黒人霊歌哀しがり　大柏
旅に訪うルーツの遺跡苔蒸して　彩平
ルーツ掘る炎天つちの固いこと　雀声
考古学こんなかけらにみたルーツ　方大
菩提寺を訪ね先祖のルーツ知る　岩光
堀と史蹟魅力のルーツ城下町　掬治
文明は地球のルーツを破壊する　義美
学説を信じる外はないルーツ　暁明

ルーツ探索系図一巻つくり上げ　實
ボスと政治ルーツは同じ汚れた手　勝一
神国のルーツ難波の津に求め　虹汀
明日見るルーツの根源探してみ　回天子
さりげない出合の旅で聞くルーツ　伊津三
忘却のルーツは渦に流しおき　越子
一族が寄ればルーツに酔うている　可住
家元はきびしいルーツの中に生き　みどり
そっとしておけばルーツに夢があり　秀峰
まばたきの星座のルーツ神秘めき　比呂志
縄文の文化にもまだあるルーツ　凡九郎
ルーツには触れず明日へ眼をむける　凡九郎
稲のルーツシルクロードをさかのぼる　綾女
地下足袋でルーツ訊ねる考古学　天彦
正倉院シルクロードに見るルーツ　勝美

人

そのルーツ探ぐるルーペに眼が光る　木魚

地

人類のルーツを秘めて土器が出る　本蔭棒

天

竹ベラで探すルーツにあるロマン　茶人

軸

ルーツ求めて日本国中掘り返し

〈一路集〉

ソーメン

岡崎　祥月
不二田一三夫　共選

さくらんぼだけをつまんだ冷やソーメン　みどり
ソーメンもガラスの器で涼味呼ぶ　多賀子
お見合いはソーメン流しで距離をつめ　虎秋
ソーメン流しさわやかに夏連れてくる　宵明
民宿の素朴さ美味い味噌ソーメン　保夫
ソーメンをすすり息づく山の宿　実男
観光に流しソーメンかり出され　柳五郎
淡白な恋かソーメン口に合い　優
ソーメンを主役に猛暑乗り切る気　本蔭棒
ソーメンへ風鈴も添え夏の膳　どんたく
スタイルを気にしてソーメンばかり食い　弘朗
糸すだれ　ソーメン老舗の風物詩　秀峰
夏ばての胃をソーメンにいたわられ　岩光
ソーメンで軽く済ませる銷夏法　軒太楼
ソーメンに冷や麦が好き更年期　きく子
ソーメンを流す清水へ蟬時雨　芳仙
寒手延べ歴史がもの云う三輪の味　勝美
ソーメン流し旅情を満たす箸を割る　春日
魔術師のようにソーメン風を呼ぶ　伊津志
豪快に跳るソーメン那智の滝　枯梢
ソーメンを供え仏の灯に座わる　彩平
ソーメンのカーテンゆれる三輪の里　青丹子
ソーメンを干せば飛鳥は土に霜　洛酔
白糸の滝がここにも三輪ソーメン　枯梢
熱湯を通りソーメンねばり腰　比呂志

佳

ソーメンを干す播州の空が晴れ　可住
五色ソーメン買うて伊予路の旅がすみ　悠泉
素麺のもてなし水車も回ってる　素身郎
貸す金はないがソーメン食って行け　豊生
絽の羽織たたんでソーメンすする客　大柏

人

メン流し曲水にも似ておかし　古方

地

ソーメンがもつれたまんま喉を越し　里風

天

カラットの指　ソーメンの下手な箸　方大

▼やはり岡崎祥月氏はご病気でした。予選したのをお手伝いして発表することにしました。ご迷惑をかけました。

—編集部—

路郎師句碑建立三十周年記念
第31回　西日本川柳大会

とき　**昭和54年9月9日**（日）
ところ　久米南町下弓削
久米南町中央公民館
柳話　川柳塔社　中島生々庵先生
兼題　鏡、舞台、子、楽しい、明日、記憶
選者　橘高　薫風（大阪）
奥谷　弘朗（倉吉）
平山　繁夫（神戸）
水粉　千翁（倉敷）
土居　哲秋（津山）
谷川　酔仙（久米南）
※敬称略

席題　2題当日発表　12時30分締切り
特別課題　**1題当日発表**
投句　各題2句以内、タテ22センチ、ヨコ4センチの句せんに1句ずつ明記、裏面に雅号を書き、**9月5日までに弓削川柳社あて。**
出席者は、当日11時までに所定の句せんで。
会費　出席　千円（発表誌、昼食呈）
投句　七百円（発表誌呈）
呈賞　岡山県知事賞ほか総合成績で
主催　弓削川柳社

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

浜野奇童

桜吹雪一途な女が哀しかろ　岩本寛子

哀しくも女心へ住む阿修羅　桑田静子

両句とも女の性の哀しさを詠んだ自嘲の句である。桜は爛漫と咲き乱れた後の潔い散り様をもって象徴される。一途な愛を求める女心をうまく対比させてまとめ、後者は、複雑な女性の心理を、争いの魔神阿修羅を以って譬えた。残念ながら、私は両作者に面識がないので失礼なことになるかとも思うが、前句が若く句意もしぼられるのに対して、後句は年配の女性を感じさせ、女性心理も複雑に重なってくる。素材によって、内容が随分変ってくるものである。

風気味を押せば休めと折れる針　桑田静子

体調のよくないときには、物事もなかなかうまく運ばないものである。娘さんの物か、あるいは義理に頼まれた物か、ぜひ間に合わさなければと無理を押しての針仕事。焦れば焦る程のいらだち。女性ならではの繊細な着眼と表現に敬服する。

駅弁に留守の夕餉をふと案じ　野口美世

久々にうつつをぬかしてと張り切った旅であったが。やっぱり家庭のことを忘れてしまうことができない主婦の哀しさ。駅弁を借りたのでおもしろい句になった。

真っすぐな愛を真っすぐ受け止める　川上富子

生真面目なまでの一途な愛。疑い等毛頭はさむ余地のない二人の心が「真っすぐ」の重なりで強調された。

幸わせと思える人の愚痴を聞き　氏林洋敏

他人はみんな幸わせに見える。自分だけがどうしてこんな目にと思うのが人間の弱さである。類想の句もあるが、調子よくまとめられている。

花吹雪天女の舞いが見えてくる　白石潔

花の宴と、花の美しさ。非凡な着想と表現が幻想を誘う。美しい句だ。

藤棚の盛りへ幹は小さくいる　矢野佳雲

花から実りの頃へかけての藤の生命力は凄ましいものだ。その力を支えるのは根であり幹であるのだが、幹でさえ葉陰に消えてしまう。藤棚と幹への着眼が新鮮な句にした。

ちっぽけな庭にも天下の春が満ち　辻式

庶民には庶民の自負がある。〝天下の春が満ち〟素晴らしい表現である。

金積んで栄養不良の孤独の死　玉木志恵子

三面に何回か報導された記事を想い出す。一人住まい老人の多くなった現代社会を痛烈に批判した句だ。福祉、強盗の社会とからんで、上五中七が、すごく心を打つ。

野球放送切って鼾に叱られる　田口せいこ

古川柳的手法であるがユーモアの句。社会を反映してか、川柳界もやたらと理屈っぽくギスギスしてきている。川柳でなければ詠めないもの、こんな句を大切にしたいものだ。

賑やかに船が傾く春の海　田中善四郎

上五から中七への表現が非凡。春の海の観光船の様子が生々しく伝わってくる。

忠魂碑今年もサクラ散りかかる　堀口欣一

遺家族にすら忘れられかけている忠魂碑。戦争の責任は那辺に有ろうとも、一番の犠牲者を祀る忠魂碑。下五が人間の無情な心の奥に突き刺さる。

作者にも鑑賞者にも個性がある。そしてそれぞれにかけがいのないよさをもつ。短詩文芸もそれぞれの個性を持つ。川柳は川柳としての素晴らしさを。その個性を大切にしたい。

初歩教室

題 ― 遊 ―

本田恵二朗

ことしの梅雨は男性型だとか女性型だとか云われるが、それはサッと降って、カッと晴れる型と、めそめそじめじめ型とを表現しているらしいが、男女同権になって久しい現代ではカビ臭くて、不快で、センスのない表現である。

男性型とか女性型という呼称は、この辺で解消放棄して、川柳人あたりが、もっと適切な呼称とか愛称を創作してくれると梅雨もまた楽しからずやということになるのだがと私は思う。

川柳の場合は、男性型・女性型があるのが当然である。女性作家があたかも男性が詠んだなと思わせる豪快な句をものしてみたり、反対に男性作家が妖しくお化粧して女性らしく詠んでいる場合もちょいちょい見かける。それは一向に構わないことかも知れぬが、女性ならではの現代女性型の句、男性ならではの現代男性型の方がやっぱり魅力的で迫力があることはいなめない。

梅雨期に書いた小文を真夏に読んでもらわねばならないのが原稿書きの宿命だし、読まされる側も季感のずれを押しつけられるという宿命をもっている。お互にお気の毒さまである。

遊びあき帰る子供は背に重く　美佐
（帰り道遊び疲れが背で眠り）
お遊びが上手な男に実がない　御前
（遊びっぷりうまい男に実がない）
遊ぶこと覚えて秘密が一つふえ　貴之
趣味ですと云って遊びの輪を拡げ　同
（趣味ですよなどと遊びの輪を拡げ）
レクに出る妻はうきうき着物撰り　美世
（レクに発つ妻うきうきと着物撰る）
受け継いだ家風に遊びの私語を見ず　句昧地
（受け継いだ家風に遊びの隙がない）
遊び金もないがそれぞれ子ら育ち　同
遊んでるとても悲しい顔をして　善四郎
働いて遊んだ若さなつかしむ　同
（働いて遊んだ頃は若かった）
親の目の死角で遊ぶ馬の耳　無人
菊作り他人は遊びと見ていたり　同
（菊作り唯の遊びと人は見る）
年金で遊んで食えるいい身分　露芳
（年金が遊んで食えと云いました）
ギャンブルの儲けは遊んでみな使い　同
（ギャンブルの儲けは遊びに吸い取られ）
孫連れて遊ぶに腰が曲り過ぎ　登
なにもせず遊んでおれと子が叱る　同
お遊びのご趣味玄人を驚かせ　柳五郎
遊ぶときは遊べすすめる叔父らしい　同
（遊ぶとき遊べ遊べと若い叔父）
遊び好きと云われ芸が身を助け　三男
（芸が身を助けるほどに遊び好き）
（定年の遊んでおれず子は高校）
サラ金に遊ぶ金まで借りる馬鹿　英子
パスポート二泊三日を遊んでる　同
（二泊三日遊び疲れたパスポート）
もてあそぶおしぼり口説かれ話聞く　紀久子
（遊びではないらしい目に口説かれる）
孫に遊んでもらってるお婆ちゃん　同
当りくじ主なく遊ぶ億の金　胡頽子
車庫が出来子らの遊び場狭くする　同
予猶もち遊びもあって楽しい人生　昌水
（それなりに遊びもあって生きる道）
遊ぶ児を忘れて喋るママレジャー　同
遊んでる時は心の目も開き　佐代子
風の子も遊び場とられもやしっ子　同
（遊び場とられもやしっ子になりさがり）
夜遊びのアリバイ友と打合わせ　誠一
次々と過去を流して遊ぶ波　同
（過去一つ一つ流して遊ぶ波）
関門を通れば遊ぶ気の四年間　瓢太
（狭き門通ったら遊ぶぞ四年間）
ゴールデンウィークへ遊びのプラン練る　同
（連休の遊びプランが少しもめ）
遊びではすまぬギャンブル離婚沙汰　静江
遊ばせるコツもおぼえて若い保母　同
遊びではない愛だから目張りする　寿予
さりげなく腕に甘えた遊歩道　同
ホームラン意識をしてか遊び球　保夫

（遊び球投げて打つ気をはぐらかし）　同
十八歳以上の大人よく遊び　な　み
同窓会の出世頭は遊んだ子　同
現代っ子遊ぶ暇まで塾通い
（現代っ子遊びも知らず塾通い）
豪遊の果てが後へ手がまわり　慶　彦
人間関係子は遊びから学びとり　同
宿題帖遊び過ぎたかミミズの字　静　佳
火遊びはしたし妻の目は怖し　同
遊び方知らない奴が金を貯め　利　美
遊ぶ金欲しさが人道ふみはずし　同
遊ぶだけ遊んで春の風と去に　可保留
ちっぽけな土産になった遊び過ぎ　同

母のない子供は犬と遊んでる　勝　美
（母のない児が野良犬と遊んでる）
よく遊ぶ子へ母として迷う日も　紀美代
ままごとにあらまあ我が家さらけ出し　同
公費らん用教育視察と云う遊び　小雅子
豪遊の陰に刑事の目が光る　同
バイトもよくするがヤングよく遊び　美智子
童心にかえる遊びへ老いの艶　同
遊ぶのも仕事も下手で嫁がない　三　和
半生は遊びそのあと泥まみれ　同
キャンパスにあしたの夢を遊ばせる　幸
もう遊びではない恋に心病む　同
（もう遊びではない恋の火もえあがり）

遊ぶだけ遊んで虚しくなってくる　同
（遊ぶだけ遊んで虚しさふとよぎる）
百円玉握って遊べる店が好き　刀　水
足枷が重くて雑兵遊べない　同
もて遊ぶハンカチ何を考える　同
（もて遊ぶハンカチ返事の語を探す）
逆光を浴びて父子の球走る　露　杖
高原の視界に心遊ばせる　同
レンタカーハンドルの遊び確かめる　同

題―テレビ―8月20日締切（10月号発表）

宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
〒七一一　**本田恵二朗**

第三百三十七回（五十四年度第七回）

大萬川柳

「捨身」入選発表

選者　川村好郎

投句総数　三百四十八句

入選　四十九句

若き日の捨身が住んでる冠木門　大阪　炉斎

子に尽す捨身の母に嘘がない　堺　憲祐

身を捨てて出直す朝の風さやか　東大阪　美子

先の先案じて捨身になり切れず　岡山　句味地

下馬評を崩し捨身の勝名乗　大州　暁明

脱サラの捨身は妻に支えられ　堺　邦晴

全身でぶつかる誠実さを買われ　大阪　満津子

捨身でやって来いとたよりにされていず　堺　ひろ子

明日の虹信じて捨身の寡婦の日々　大阪　真砂

新弟子が捨身であげた白い星　大阪　人美

左遷地の決意捨身で立ち上り　交野　テルミ

育児への捨身は寝姿など見せぬ　大阪　きくみ

社を守る捨身の偽証ためらわず　東大阪　喜洸

捨身にはまだまだなれぬ欲があり　大阪　なりこ

許されぬ二人捨身の愛となり　岐阜　誠一

主導権握る捨身の女の瞳　和歌山　武雄

小鳥さえ捨身の愛を親は持ち　大阪　清女

やりくりの捨身のように約手切り　岡山　金太郎

捨身とも秘めた慕情は断ち切れず　和歌山　寿子

大時代を捨身で乗り切る紀文船　富田林　美乙女

三浪の捨身深夜の灯がともり　東子　悠泉

出直しへ捨身と誓う太い眉　八尾　美幸

一筋に燃えて捨身になる女　名古屋　枯梢

社の危機を救う捨身とハーフバーゲン　大阪　小雅子

捨身なら何でも出来ると他人様　寝屋川　あいき

捨身かも知れぬ女を恐く見る　大阪　刀水

人間の強み捨身になって知り　大田　軒太楼

子に賭けた捨身に愚痴はこぼさない　西宮　百酒

悔どった敵の捨身に歯が立たず　米子　千代

辞める気の捨身意見に妥協せず　島根　早苗

本気にもなれず捨身にもなり切れず　三重　冬花

捨身から付きが変って来た勝負　大阪　頂留子

土壇場の捨身が付きを呼び戻す　大阪　誓二

捨身になればなんでもないピンチ　大阪　文秋

捨身の覚悟弱気は口にせず　和歌山　幸

一枚の辞令に捨身強いられる

捨身にはなれぬ会社へ朝の靴　今治　宵明

ふるさとへ帰る希望を絶つ捨身

よい音を残し捨身の胴決まる　大阪　文秋

ベテランの鼻をあかしていた捨身

捨身で来る気概へ既に負けている　佳句

甲子園捨身敗けてもいいところ　大州　暁明

子の為に捨身の女菩薩像　大阪　きくみ

反論を捨身の覚悟でまくし立て　岡山　金太郎

逃げ腰へ捨身になってくる女　和歌山　和子

ゴキブリが捨身でふわす宙返り　今治　胡頽子

人ノ[illegible]　米子　千代

ひな鳥を庇う翼に見る捨身　大阪　柳志

背水の陣に捨身の矢をつがえ　和歌山　公子

天ノ[illegible]

青い鳥捨身の[illegible]し歌いだす

選者吟

そのくせに恋[illegible]かけては捨身なり

昭和五十四年ベートテン（六月現在）

一　百酒　一二、五　西宮

二　満津子　一二、五　大阪

三 優 一一、五 富田林 一〇 美幸 八、五 八尾 一七 邦晴 六、五 堺

四 千代 一一、〇 米子 一一 花梢 八、五 富田林 一八 武雄 六、〇 和歌山

五 寿子 一〇、五 和歌山 一二 あいき 七、五 大阪 以下略

六 道子 一〇、五 大阪 一三 憲祐 七、五 堺

七 和子 九、五 和歌山 一四 小雅子 七、〇 大阪

八 柳志 九、〇 大阪 一五 真砂 七、〇 大阪

九 文秋 九、〇 大阪 一六 吸江 七、〇 藤井寺

昭和五十四年度第九回

「刺激」三句以内

締切八月二十五日

第十回

「繰り返す」三句以内

締切 九月二十五日

投句先

〒593 堺市堀上緑町一ノ三ノ七

藤井一二三方 **大萬川柳係**

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼中島生々庵主幹は6月24日に開催された第三回全日本川柳大会の委員長としての重責を果たされたが、公私多忙の今日この頃である。主幹ご夫婦は玉青先生ご指導の第18回青玲社日本画展に出品。6月8日～13日までの阪急百貨店7階催場が川柳人多数拝見した。

▼6月の「地下鉄」刊行記念句会につづき7月の路郎忌・「続・老いの坂」刊行記念句会ともに百名突破の出席が二ヵ月続いた。

▼国鉄川柳句集（第二十三集）刊行・序文—河村日満—編集—両川洋々—刊行委員の中には福田保子さんも参加。二八一ページの作品集に本社同人が多数雅号を連らねている。頒価千円。発行所—〒689—11鳥取市東大路六四・両川洋々方全国鉄川柳人連盟。

▼原爆句集。杉　久美枝著「花ばさみ」—序文・中津泰人。生まなましい被爆体験記が十七字となって訴える熱血川柳だ。—原爆で肉身を瞬時に五人失った。それから数年のうちに夫の兄と弟、そして私のも、夫も次々に原爆症で他界した—と著者は語る。（番傘同人）頒価七百円（送料共）〒728—06三次市海渡町四六五・福永ヤスエ方・杉久美枝。

▼53年度ふあうすと賞発表。最優秀「船を魚礁の浸水に嗚咽もない—平田のぼる」優秀「珈琲がもとの香となり旅終る—前川千津子」優秀「ある時のいのち確かに子を忘れ—伊藤定子」紋太賞「数え唄母の水甕ひびわれぬ—松本環」優秀「大つもごりの鐘を数えて誰にやる—児玉怡子」優秀「口ゆすぐ水の冷たさ人去りぬ—野田伸吾」

▼第10回川上三太郎賞は、「昏れる木に何吊るしても吊るしても—ほか四句—細川不凍」準「悩んでも雪の白サしか踏めぬ—ほか四句—寺井研三郎」準「烙印を押されて靴が軽くなる—ほか四句—荻原鹿声」第五回白石朝太郎賞「父の一徹涙を溜めたまま枯れる—ほか二句—熊倉風車」が柳都七月号に発表。

▼第16回（53年度）さいたま年度賞「泣きに来た部屋におどけた鳩時計—ほか四句—関ヒロ美」—「マッチ摺る朱い思い出が還る—ほか四句—荻原鹿声」—「不発弾女淋しく持ち帰り—ほか四句—笹本夕子」

▼「川柳」七月号へ「川柳で貯金残高が増える」を西尾栞氏が執筆。そしてイメージ吟の選者。本社関係では嘉数千代香さんが座談会に出席。野村太茂津氏が西山幸さんの10句を推薦、「川柳全集」第一回村田周魚・野村圭佑篇は発売中。

▼第23回愛媛夏の川柳大会は8月5日（日）10時開催。会場は大州市社会教育センター。（大州市三笠通り）題—誓う・デスク・横・光線・栓・こっそり・近道・でまかせ・人間、席題一題—特別課題「流れ」各題二句。会費千円。投句先—大州市常盤町四・米沢暁明宛・締切8月2日（投句料五百円封入。水郷川柳社。

▼風—十七号。いかにも短詩型らしい洗練されたスタイルには共感を呼ぶ。渡辺可奈子・森中恵美子・窪田久美諸氏の作品群。発行所大阪府高槻市竹の内町二二～一（河野春三方）定価五百円（送料共）

▽同人の動向△

▼若本多久志氏（西宮市）は元気をとり戻され、句集「続・老いの坂」B6判二百余ページをひとりで編集された。頒価千円（送料共）本社でお取次ぎします。

▼小西無鬼氏（兵庫県）から—ささやまの句集は一八〇ページ、序文は西尾栞氏。どうにか本の型になってきました。

▼大坂形水氏（大阪市）の親友である内田克己氏（大阪手帖主宰）の追悼号に、「大阪手帖どの頁にも君の息」ほか、追悼句を寄せられた。

▼工藤甲吉氏（青森市）の「ワクチンが無い日本の平和論」が〝諷詩人〟第54号に推薦されている。

▼河村日満氏（鳥取市）から—故茗人氏の遺句集の序文を依頼されました。茗人忌にはよろしくお願いします。

▼新岡回天子氏（唐津市）は6月10日付の〝松浦文連

花　公栄社
富田林市富田林町24—4
TEL 07212 ③ 2 0 6 4

ニュース"に「唐津と川柳」を執筆。孤立無援の地で活躍されている。

▼両川洋々氏（鳥取市）は第二回鳥取県川柳大会で堂々知事賞を獲得。

▼渡辺独歩氏（倉吉市）は県議会賞にとそれぞれ入賞された。

▼児島与呂志氏（藤井寺市）から―句集の祝吟があとから来ました。「人生を乗り換えるとき妻がいる-水客」―「夫婦和し地下鉄乗りつぎ旅路ゆく―綾女」―「あこがれは鳥の声聞く自適です―英壬子」

▼柳楽鶴丸氏（松江市）から―山陰の俳画展の準備などで路郎忌に出席してもすぐ帰松します。

▼本多柳志氏（大阪市）は教委主催の「老齢者の声」に入選。その作品入選二十篇が本になった。

▼福浦勝晴氏（岸和田市）は六月十八日をもって東京商工リサーチを退社。これからは川柳に打ちこむとのこと。

▼西田柳宏子氏（大阪市）六月中旬顔面神経痛で関西医大七階七〇二号室へ入院。同病院脳外科に生々庵主幹の令息医博がおられ見舞いに来てくださったそうである。経過は良好とのことである。

▼河内天笑氏（堺市）は大鳥神社菖蒲祭りカラオケのど自慢大会に優勝したり、この人らしい明かるい中に二人の坊っちゃんがぜんそくとのこと。いろんな治療をされているが一日も早いご全快を祈ります。

▼渡辺菩句氏（倉吉市）から―六月十九日に父が死亡そのあと母が入院、そんな中で一路集の選に挑みました。

▼勝山双葉川柳会は四回目の句報を出した。河野君子さんの麗筆をコピーしたものである。女性ばかりのグループだが智子、君子さんらの指導で新鮮な句が楽しい。故西出一栄さんの後継者である英子さんは南大阪川柳会でも天の天を獲得。

▽旅　信△

▼第25回愛媛川柳研究大会から寄せ書拝受。文庫・静水氏ほか本社同人が多数参加。

▼植村客遊子氏（姫路市）から―峰山吟行句会の寄せ書拝受。

▼都倉求芽氏（京都市）―岩手県山田町タブの木荘から―夏の陽に素顔が光る岩と海―求芽。

▽8月の句会△

▼**菜の花句会**は十日夕六時から西郷会館で開催（いつもの会場）会費三百円、題と選者は「墓・栞」「雲・鬼遊」「節・幸生」「バスト・未定」席題二題・各五句以内。投句は郵券百円、締切当日到着分限り。投句先・大路美幸宛。

▼**堺川柳会**は十二日（日）午後一時から―題は―除草・相続・手伝い・押入れ。

▼**南海川柳部**は十六日六時から南海電鉄本社食堂内で開催。題―悪乗り・ひらめき・視聴率。

▼**南大阪川柳会**は二十日六時から―大萬で開催―題―納得・手軽・しわ寄せ・ゴキブリ。

▼**東大阪川柳同好会**は二十五日六時から東大阪市立中央公民館二階で開催（近鉄永和駅南）題―盆・砂・物干し・ハイヒール。

★**暑中お見舞い申しあげます**

茗人忌川柳大会

とき　昭和54年8月26日（日）午前10時

ところ　鳥取駅前「オリエント会館」

柳話　西尾栞先生

兼題　「太陽」　橘高薫風選
「ほのぼの」　尼緑之助選
「別居」　野村太茂津選
「メッキ」　河村日満選
「梨」　小林由多香選

席題　当日二題　各三句以内

会費　八百円（作品集呈）

懇親会費　千五百円（希望者）

投句料　五百円（作品集呈）

投句のみの方は8月18日迄に着くよう鳥取市相生町三丁目二〇四　森田熊生宛送付して下さい。

うみなり川柳会

右の写真は常任理事一同からの記念品を主幹からわたさる。左の写真は路郎先生の胸像

多久志氏の句集刊行記念と路郎忌の二本立てとあって、開場そうそう百名突破。前月と同じように会場のイスを総動員したが足らずまたまたご迷惑をかけてしまった。

会場正面に多久志氏秘蔵の「古稀はよし弟子に孫弟子ひまご弟子」の路郎先生の掛け軸

路郎忌ならびに

若本多久志 川柳句文集「続・老いの坂」発刊

―喜寿・金婚記念句会―

7月6日・会場　金属会館

―その下には生々庵主幹のこれも秘蔵の先生の胸像があり、じっと食い入るように凝視する人たちが多かった。今日の路郎忌には番傘の長老金泉萬楽氏が兼題の選者に、八月句会の水府忌には西尾栞氏が選者として出席、ここに両社の交歓句会が成立することになった。

番傘の方々の大挙友情ご出席や、他社の方々のおかげで句会はグンと盛り上がる。

柳宏子氏入院のため、橘高薫風氏が司会。昭和四十年の七月に路郎先生、八月には水府先生が逝去。両巨頭を失った関西柳壇は一時はどうなるかと懸念されたが、あとにつづく両社の良識が今日の隆盛を呼ぶことになった。島根・鳥取の同人諸氏も駈けつけてくださった。

謝辞に立った多久志氏は多くの方々のご支援にこたえるため療養専一に、一日も多く長生きしたいと述べられ、路郎先生に句集刊行のご挨拶をしたいと原稿をとり出された。

句集刊行のご挨拶

路郎先生！お別れしてから既に十四年がたちました。

あれからずっと、ご遺訓である「いのちある句」への精進を続けて参りました私ですがまだまだ名句も作れない私で、まこと慚愧に耐えません。

思えば、十二年前、先生の三回忌法要句会を自安寺で行いました際、私の句集「老いの坂」をご霊前に捧げましたが、本日第十四回路郎忌句会に当りまして、拙い句集ではございますが「続・老いの坂」を刊行して再びご霊前に捧げたいと存じます。

私だけはまずい作家でございますが、先生古稀のご作品にある「弟子に孫弟子、曽孫弟子」達は、それぞれ立派な句集を続々と刊行して、川柳塔社を守りつづけておりますことを、せめてものご報恩と思召して下されば幸甚でございます。

どうぞ、今後共、我々へのご加護を一層、賜わりますようお願いしてご挨拶と致します。

昭和五十四年七月六日　　若本多久志

常任理事からの包装のままの贈り物を生々庵主幹からおわたしすると期せずして拍手が起こる。薫風氏は包みの中は、クリスタルの菓子器であると種明かしをした後で、多久志氏からご被露されたが立派な菓子器だった。金婚にふさわしい記念品である。

生々庵主幹の柳話―まず路郎先生のご遺徳をしのばれ、生前の先生を知らない人々でもみな同じ思いであろうと。

一年三百六十五日のうち、三百日位は他の雑事に追われ、瞼の裏の先生のお姿を見失ってはいないか―というのが私の現状ですと謙虚に語られる。

句集「続・老いの坂」のことは、すでに同句集の序文に主幹が書いておられるが、多久志氏の喜寿とご夫婦の金婚を記念して刊行した句集を路郎先生のご霊前に供えられたことはまことにご同慶の至りである。

ここで主幹は「人間長寿ということでもお話し申しあげたいと思います」と、専門の医学にお話が進展する。

「平均寿命がやっと五十歳を超えたのは戦後のことだから、今では五十歳は働き盛りと云うのに五十五歳定年はどうみても長寿社会の実情に合わない。老いてますます若々しい人もいれば若いのに老けこんだ人もいる。

年をとることはやさしいが、よく老いることは難しい―ジッド」

平均寿命が二十年のびて、一般には長生きするようになったと受けとめている人が多いが実はそれほどではない。明治二十四年にはじめて衛生統計が出来た頃にくらべると、五十年間に約四年しかのびていない。このことは若い間に死ね人がなくなり、みんなが老人になるということである。「長寿」になるわけではない。老人全人口を六十歳以上とすると、昭和五年から十年までは約一割、昭和五十年、約三割が老人全人口。

平均寿命が二十年のび、人生五十年が人生七十になったように思えるが、六五歳以上の老人が人口の一〇%占めるようになると、公園のベンチに新聞と老眼鏡を持ち、じっと座っている老人が目につくようになる。欧米でよく見られる光景である。

若い時から中年にかけては、スポーツ、フアッション等にいくらでも遊ぶことがあり、日の経つのも早い。老人になると、それらがすべてとりさげられる。それでも中年すぎまでは体がいうことをきくので、友だちと遊ぶ事も出来る。しかし六十歳頃になると、神経痛、肩こり、歩行の不自由など、自分の行動も思いのままにならなくなる。しかも、ずっと働きつづけているような場合は老化がやってくるのがおそいが、若い時から脳も体もきたえてない人の老化は早い。

一番大切なことは、心のよろこびを感じるものを若い時から持っていることである。

老人が倖せになるためには、如何に政府が年金を支給し、いい医療を提供してもだめであって、自分自身が考え、認識してゆく事である、という意味合いから云うと、若本多久志さんの喜寿は申し分ないことであろうかと思う。

句集の至るところに多久志さんの若い時からの心構えというか、老後の備えというかを伺えるからである。時間がないので、くわしく話が出来ないが、句集の至るところに自分の今日あるのは神仏の加護、人間の出会い、ひいては川柳生活の歓びというものの外ならないと伺える。そして大切な事は、そうしたすべてのものに対して心なる感謝と合掌の謙虚をたえず持ち続けて来た七十年である。

阪大医学部長の山村雄一教授は「人事をつくして天命を待つというが、長寿の方法は天命を待って人事をつくすということだろう」と名言を吐いておられる。

と多久志氏への言葉のプレゼントは正に主幹の独壇上である。

本日、最後の一句は、金泉萬楽氏の佳句にかがやいた。

（受付―与呂志・敏ほか）

（進行・橘高薫風―記録・高杉鬼遊）

（ペン・一三夫―カメラ・岳人）

☆金一封拝受　金泉萬楽氏

☆祝電　堀江正朗・芳子氏

出席―与呂志・翠光・古方・雅風・多久志・葉平・一三夫・鬼遊・滋雀・紫香・弘朗・鶴丸・水客・明朗・勝美・川狂子・潮花・邦晴・秀信・聡夢・千代三・夕花・瓢太・育園・美乙女・宏子・萬的・千万子・右近・蘭・翠公・柳志・智子・君子・綾女・与史・武雄・太茂津・三十四・弥山人・一本杉・没食子・勝・碧水・千世子・婦美子・清人・柳伸・寿男・〆女・形水・喜風・柾左子・勝晴・酔々・白光子・吸江・岳人・ゆきを・としよ・柴田恵美子・栞・宇宙太・文秋・修史・庸佑・幸代・操子・ひで・萬楽・英子・湖風・寿子・いさむ・百酒・あいき・憲祐・涼一・幸生・恒明・花梢・規不風・たつお・度・みずほ・富志子・サヨ子・白兎・洋敏・武助・青踏・花村・左久良・芳川・誓二・頂留子・敏・森中恵美子・生々庵・史好・弥生・清人・あき子・薫風・小松園・凡九郎・鎮彦・弘生・葉子。

席題「祝　電」　藤井明朗選

ライバルの祝電もよし被露宴　栞
祝電を手に嬉しさの顔二つ　川狂子
祝電と花輪が届く初舞台　潮花
箸持ったまま祝電の受話器持つ　涼一
新婚へ祝電しっかりやって来い　三十四
百歳まで生きよと祝電にはげまされ　三十四
祝電も以下同文の中に僕　没食子
ひ孫から来た祝電が座を沸かせ　千代三
孫のコトバで祝電が読みにくい　古方
大物の祝電ばかり被露され　瓢太
美しい嘘祝電につぐなわれ　太茂津
人徳を見せて祝電積上げる　柳志
祝電を打つ時すでに負けている　水客
以下省略の中に祝電押し込まれ　聡夢
ロンドンからの祝電声はり上げる　吸江
柳縁の祝電北から南から　武雄
祝電を打って区切りをつけた恋　夕花
司会者の機転祝電のタイミング　清人
祝電の一句は先に読んでくれ　萬楽
祝電を打って少うし妬いている　智子
ガンバレと言う祝電がほほえまし　千代三
祝電の以下同文は束にされ　柳志
解散の含み祝電乱発し　右近
祝電にすこし敵意がこめてある　ゆきを
込み上げて来る祝電を握りしめ　一本杉
祝電を鞄にめてハネムーン　としよ
番号で打つ祝電の小さい義理　失名
祝電で小さな義理を果しとく　操子
売名の祝電ばかり座が白け　操子
祝電へ飛びあがりそなにらみ鯛　度
祝電を打ってゴルフへ行く社長　憲祐
祝電のあるじはすでに酔いつぶれ　萬楽
交際の幅の広さを知る祝電　秀信
祝電があふれめでたく誤読する　芳川
祝電へ父の背中は丸くなる　岳人
祝電と一緒に本人飛んで来る　明朗

兼題「書　く」　正本水客選

懺悔録書くにはペンが軽すぎる　枯梢
妻の名を書くときペンは重くなる　曲ん手
皆書けば嫌な私が見えてくる　幸
達筆がいっそうあわれな経木書き　静馬
愛情弁当にハートが書いてある　鎮彦
食べある記書いて丈夫な胃を誇り　碧水
善人の絵馬に本音が書いてある　湖風
借用書冷えた心で書いている　度
バランスをさすが見事に看板屋　碧水
大道の芸は一気に龍を書き　史好
書くために読みとうなって読んでみる　古方
書き初めに一番好きな文字を書く　文秋
書くくせをつけると写経始めてみ　ひさを
伝言板に書く字も翔んでる青春よ　千世子
勝てば官軍歴史が書き変わる　誓二
表札を自分で書いて嫌になり　萬楽
筆不精たまには代筆たのまれる　修史
書くだけは書いて見せますとさからわず　トメ子
筆おろす紙へしばらく眼をつむり　潮花
追伸を書いたが何かもの足りず　翠公
人文字で母校の名を書く甲子園　敏
筆書の母は何かと利用され　あいき
随筆で結構女食べてゆき　柴田恵美子
涙おさえて心と別の事を書く　一二三
傍若無人ふすまに書いたクレヨン画　吸江
墨すって来て短冊に書けと言う　紫香
閻魔帳に書きかけてある僕のこと　喜代志
どんな字を書いても浄土へゆく経木　憲祐
駆け込み寺でせめて落書きして帰る　夕花
書くことが嫌い電話をかけてくる　萬楽
書ける手が持てば素直な筆である　滋雀
筆持てば肘も呼吸も鎮まり　婦美子
花の名をノートしてから撮るカメラ　萬的
沈まない太陽胸に書いておく　寿子

始末書を一枚書くと強くなる　史好
米つぶに書くと祈りになってくる　夕花
立志伝書いて姿婆っ気まだすてず　水客

兼題「喜寿」 好郎氏代選 **戸田古方 選**

喜寿祝いポックリ寺を口にせず　優
まだ生きてはったか喜寿の祝来る　どんたく
横道に外れても喜寿はやって来た　曲ん手
既に喜寿まださとられぬ人として　凡九郎
一万歩欠かさぬ喜寿をうらやまれ　邦晴
陶工の喜寿火加減が気に入らず　涼一
甚平着て息子の世話にならぬ喜寿　青踏
医者知らぬ喜寿小遣い使いすぎ　柳伸
喜の祝茶碗のひびを大事がる　水客
喜寿過ぎて子言を信じようとする　智子
砂時計たしかめ喜寿の昼の風呂　芳川
喜寿でっかそうでっか走りまひょう　岳人
喜寿の手で愛車ゆっくり走り出す　紫香
田を売った過去を持ってる喜寿のシワ　育園
色紙へ手形を押す父の喜寿　誓二
せかせかと飯食うくせがとれず喜寿　喜代志
労われば明るく怒る喜寿若し　太茂津
喜寿祝う余生に火種たやすまい　鎮彦
喜寿過ぎてなお甘たるい句も作り　萬的
母の喜寿称える子等のたとう紙　英子
喜寿の坂越えると海が見えてくる　聡夢
喜寿にしてなお初恋を懐しむ　史好
曽孫の数を笑い合っている喜寿　武助
喜寿頑固医者の注意へ医者を変え　清人
喜寿にして学びの塔はまだ高し　婦美子
ロボットじゃないぞと喜寿にも一家言　秀信
喜寿迎え足が今日また畦に立ち　雅風
今一度翔んでみたいと思う喜寿　武雄
河内野に生まれ音頭で喜寿祝い　酔々
サーカスのジンタが好きで喜寿の父　いさむ
喜寿感謝いわしの頭に手を合わし　度
喜寿の嗤いは仮面でない笑い　栞
食うて寝てそんな余生で喜寿迎え　柾左子
にんげんの喜寿を不思議に思う亀　鬼遊
喜寿の母みごと阿呆で押し通す　勝
うっかりと古稀と喜寿とをまちがえる　古方

兼題「内祝」　菊沢 小松園 選

ここまでを呼んで内輪の祝い事　〆女
内祝心の垣根とれた朝　維久子
内祝私の鯛が小さすぎ　〆女
内祝出世がしらがよく目立ち　優
内祝鶴と亀との柄にする　枯梢
義理がたい人からとどく内祝　鎮彦
内祝のれんの根性汚さない　弥生
内祝父の一字を名に貰い　史好
真心を豊かに詰める内祝　千代三
内祝小豆が煮えるいい匂い　千代三
内祝妻がひっそりいてくれる　武助
嗅ぎつけたお祝がくる内祝　形水
内祝長屋の人情に嘘がない　雀踊子
家中の知恵をしぼった内祝　邦晴
相伴の方が酔ってる内祝　武助
年金をはたいて母は内祝　あいき
座ぶとんもコップも足らぬ内祝　柴田恵美子
内祝今日だけ物価高言わず　与史
内祝もうお隣へかくされず　明朗

第15回
水府忌八月句会

とき S54年8月6日（月）18時
ところ 北区 大融寺
会場への道しるべ
阪急ウメダを東へ（扇町線）
市バス太融寺前スグ
電話 三二一—五四八〇
かいひ 三〇〇円
お話 「水府を語る」 鈴木丙午郎（呉）
宿題 浄土　片岡つとむ 選
追う　太田茶人 選
三味線　西尾栞 選
家　岸本吟一 選
席題 二題（各題三句）
締切 19時20分

番傘川柳本社
〒530
大阪市北区西天満五丁目
六番二六—六〇五号
電話三六一—二四五五

内祝新居に父の軸をかけ　潮花
人柄がにじんで届く内祝　弥山人
妾宅へもこっそり届く内祝　涼一
内祝小さな義理が戻って来　雀踊子
内祝母もひとさし舞うと言う　水客
内祝母の背中にある疲れ　岳人
内祝しみじみ幸せかみしめる　修史
鯛の尾がみんな上向く内祝　宇宙太
家中のネジゆるませて内祝　寿子
内祝ママの笑顔も配られる　度
内祝のしも笑っているような　度
内祝女が決めてつつがなし　森中恵美子
内祝血の連がりが泣いてくれ　小松園

兼題「読む」　金泉萬楽選

わたくしをもてあます日の聖書読む　幸
顔色を読んで話の向きを変え　〆女
どう読むか戸籍係の知らぬ事　弘生
僕だけが読めないのかな書道展　邦晴
代読の祝辞ちょいひっかかり　庸佑
百ぺんも読む孫からの見舞状　敏
裏の裏読んで絶好球をほる　三窓
聖書を読めば不眠がよく眠り　花村
時刻表読む時もはや旅ごころ　あき子
立読みの苦学本屋に恩があり　たつお
顔色を読む少年の自閉症　雀踊子
読み切った将棋の駒はそっと置く　幸生
老いの坂まだまだ株式欄を読む　森中恵美子
勉強のかたちでマンガ読んでいる　智子
どう読むか捜査一課へ謎残す　三十四
漫画読む青年ばかりタコ焼屋　芳川
立てば読み座れば眠る満員車　武助
能書きを読んで梅酒のビンを買う　涼一
「財界」を読んだ知識で社の訓示　文秋
代読と声を落して秘書若し　花村
読み物を積むと安眠剤になる　柴田恵美子
腹で腹読んで霞ヶ関暮れる　与史
変体仮名読むのに祖母の出番くる　庸佑
吉報は半分読んで妻を呼び　翠公
やりくりがついて支払う金を読む　操子
読むときのめがね大事に旅カバン　青踏
秒読みに入り思案のきめどころ　育園
その先を読み盃で封じとく　百酒
闘病記真似は出来ぬが読んでみる　酔々
小卒も天声人語だけは読む　鬼遊
遠まわしの言葉受話器の裏を読む　婦美子
廃坑の立て札を読む裾が冷え　萬的
不気味なる天元敵の想を読む　翠公
病身の姉が読んでた千恵子抄　史好
他人ごとの伝言板をみんな読む　喜代志
婚約後料理の本にかじりつき　多久志
読む程に聖書は意見してくれる　千代三
退職をしたら読みたい本を読む　萬楽

兼題「金婚」　西尾栞選

金婚の旅子どもらが決めた旅　早苗
金婚の夫婦茶碗の位置たしか　幸
金婚の思い出深き相聞歌　酔々
金婚の今日東から陽が昇る　白兎
金婚の夫婦欠伸で妥協する　芳川
糖尿と血圧で金婚にたどりつき　ゆきを
ベターハーフならぬお人と半世紀　一本杉
金婚のふた文字それが勲章さ　三窓
金婚の晴着をねだる妻でよし　あいき
どっちかと言えば金婚妻が老け　柴田恵美子
金婚の抱く花束に明日がある　寿子
金婚へたまに茶碗も割りました　喜代志
金婚の目耳口はもう無欲　鎮彦
金婚の箸と茶碗は別に持ち　青踏
金婚の峠から見る七曲り　鬼遊
子や孫の数に金婚かこまれる　聡夢
金婚の旅で盆栽気にかかり　青踏
五十年夫婦はヤジロベエでいる　水客
金婚へたった一つの愛でした　夕花
長男の祝辞に金婚こそばゆし　失名
戦争がなかったら今年は金婚式　鶴丸
句読点さと金婚涼しそう　古方
金婚のどちらも長寿筋と言う　一三夫
金婚へ遅々と重ねてきた積木　滋雀
金婚へ海の深さになっている　水客
金婚が来ても女房がまだ恐い　操子
金婚の妻がぼやいてばかりいる　智子
金婚の旅へだらすけ持って行く　岳人
金婚とは名のみ生活保護を受け　誓二
金婚式別れ話もあった過去　多久志
金婚式養子の身分まだつづき　三十四
金婚のどちらも丸いことば持つ　森中恵美子
補聴器で正座の金婚笑い合い　一三夫
金婚の腰しゃんとして一万歩　萬楽
金婚の本音と別な謝辞を言う　栞

（河井庸佑整理）

▼前号7―梯子酒足が教える次の店は**希久志**作

川柳たけはら

〒725　広島県竹原市竹原町田中

山内静水方

山内静水　山内房子　鈴木かつ子　岩本寛子　岩本笑子　岩本文晴　古田鈍舟　古谷節夫　小島蘭幸　三宅不朽　森井菁居　時広一路　槇田英詩　上原松緑　高橋鬼焼

ほか一同

海招く

紀州訛りのやすらぎに

川柳わかやま

暑中お見舞い
申しあげます

大萬川柳会

どんぐり川柳会

まるべに川柳会

あすなろ川柳会

暑中お見舞い申しあげます

季節料理・折詰

大萬

大阪市阿倍野区松崎町
TEL (623) 5031・5032
南区畳屋町三ツ寺センター
TEL (211) 9184

七月句会

こぼればなし

―岩井三窓氏に会う

ぼくが「川雑」の編集部入りした頃の「番傘」の編集長は礒野いさむ氏だったように思う。その後は斎藤清幸、榎本聡夢、奥田白虎、岩井三窓諸氏と名編集者ばかり、さすが大番傘の名に恥じない方たちである。

水府先生が文字にはうるさい方だったので新かななどは一番正確だった。一度だけ「××大会近ずく」といったような宣伝文があって、「ず」が三、四ヵ月つづいたが「づ」と訂正されたのを覚えている。水府先生が気づかれたのではないか、とおもった。

ここまではマクラで、七月句会で三窓編集長とお会いできたことはうれしかった。およそ句会と名のつくところへは一度も顔を出さないぼくだが、こうして親しくお会いするとやはり楽しい。

開口一番、

「誤字や誤植にはシンドイですナ」

「まったく」

「お宅は三校までとられるのですか」

「いいえ再校で責任校了にします」

「うちも再校までですが、責任校了が完全に直っていることが少くないので困ります」

「アレには困りますね」

やはり誤字、誤植談義になった。故豆秋さんにいただいた、三窓氏の句集「三文オペラ」を誰に貸したのか家にないことを何かのハガキで書いたことがあった。三窓氏はとっておきの一冊だが、と送ってくださった。交換のかたちで拙著「川柳寄席」をお送りしたことがある。

最近のお便りの中に「金と原稿さえあれば句集が簡単に出来ると思っている人が多い。いくら編集（校正ほか）の苦心を言ってもわかってくれない」とあった。同感である。

ここんとこ何冊かの句集を読んだが、ほとんど誤字と誤植が目立った。編集というものは、誤字誤植のほかに〝スタイル〟というものがある。活字の使い方、または紙の選び方なども編集者の責任である。かつて評判になった名句集など、紙の目を無視したか、どのページも〝波〟がうっていた。紙には横目と立て目があるのを知らなかったのであろう。

（不二田一三夫）

雅号ぶっちゃけばなし（181）

ちゅうぞう

松本忠三

本名即、雅号である。大正七年千葉県に生る。なんといってもその頃は君に忠、親に孝の時代。忠は忠義の忠、三は三男坊の三と命名された次第なり。その為か兵役は甲種合格のパリパリで、見事近衛歩兵第四聯隊機関銃隊に入営、現役を東京で過ごし引続き召集の形で外地を転戦す。然しながら武勲は一向に樹てずじまいである。よく雅号のほうが売れ過ぎて、本名はさてといった人が多い。小生の場合は本名即雅号も売れていない。柳歴は独りよがりを含めまあまあの古さ。この辺で川柳に忠誠を誓い、精進を重ね、武勲を樹てねば、お墓の両親に申訳けない。

会社役員・六十歳

花地抄壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

うみなり川柳会

小林由多香報

埋められぬ溝の深さに気がつかず　とし江
断絶の溝へ代議士金を撒き　洋々
融通のきかない奴が溝を掘り　無人
月の溝おはなしを生み夢を生み　熊生
脇役の濃い口紅は不貞めき　笑王
脇役が憎まれて芸引き立てる　富美子
脇役で鶏匠実権握ってる　葉士人
肩書を捨て脇役に徹しきり　豊生
倖になりますふたり虹の夢　好子
誕生日一つ大人になった顔　由多香
罪のない子供を罪な親が生み　盛桜
今日きりで社とお別れの誕生日　日満
おだちんはいいよと父の日肩たたく　華子
父の日の膳に大関どっかりと　素心
父の日の肩にくい込む荷の重さ　ゆたか
父の日を父釣って来し鮎料理　吾朗
ごまめむし明日の日和を夢にみる　とみ枝
蒸し返す話に一役買って出る　希満子
蒸せる日の孤独愛する娘が浮かび　天涯
蒸し暑い日はノータイで若返り　貞山

どんぐり川柳会

谷垣　史好報

一片の模様に湧いた考古学　吐来
裾模様　野良犬の目の高さなり　岳人
雨模様言いたいことはたんとある　小松園
横糸に女のこころ伊予絣　鬼遊
ひと筋の道　雑音にまごつかじ　好郎
政治家の本音X線で見てみたい　奈々
誘導につい乗せられて吐く本音　瓢太
海　日ごと夏の模様を描きはじめ　憲祐
あざやかな失意をえがく風の紋　酔々
紙人形　和紙が夢みている模様　真砂
スト参加本音はいい子になりたくて　雅風
改憲へ本音は世論を持っている　勝美
人形はじっと見つめてまごつかぬ　美幸
奥さんと呼ばれてまごついたのも昔　吸江
ただならぬ人間模様　秘書課に居　薫風
生きてますどなりもします本音です　サヨ
唐草模様が子供心に恥ずかしく　史好

京都塔の会

松川　杜的報

伸子張り糊はく母の手は確か　芳子
出払って独りをゆする若葉風　佳丹子
ライバルがこちら見ている目をそらす　明代
五月雨に煙って山の坊暮れる　笛珠
五月雨に漁港は油の浮いた海　萬的
五月雨に庭の草木が背のびする　三求
へつらいの甘さ行儀をみすかされ　弘之
好きだとは云えず少しだけ甘え　美穂
消ゴムの丸さが知っている甘え　杜的
片ちびの靴で甘えを蹴ってゆく　水客
浮き草をあやめへ寄せる風があり　紫香
あやめ打つ雨むらさきに雫する　潮花
天領のよすがを残すあやめ園　和友
お寺よりここはあやめの花で知れ　飛鳥
行く雲へもう背のびせぬ古木　求芽
三百年の歴史古木にある木肌　誠史
どの角度からもシャッターに合う古木　白渓子
見つめてた歴史古木は語らない　王石

菜の花句会

高杉　鬼遊報栞

綿菓子屋鎮守の森の入口に　柳伸
コッソリとボトル持ち込む見舞客　恒明
雨の日は軍艦マーチの処に居る　秋美
毒消しを飲み過ぎたのかお人好し　柳宏子
民芸の中に生きてたお六節　綾女
父使う鋸息子にも貸さず　寿馬
毒蛇の夫婦は毒に気が付かぬ　夕花
六月の雨に河童は恋を知る　鬼遊
鋸を借るとついでにひいてくれ　昭子
旅に出る雨女またついてくる　酔々
証人に吹き矢が届かない焦り　頂留子
雨上りの庭で和解の手を握ろう　小松園
一匹の蟻が焦って列乱る　弥生
一滴の毒に女は生きかえる　雀踊子
離農する男に雨はもういらぬ　紀美代
灰皿が焦ってますと言うている　美幸
人民の名で持たされる重い石　豊子
春となり森の小鳥も恋をする　幸生
民法のお世話は要らぬ形見分け　糸葉
別荘のちらしに森が描いてある　河原みのる報

川柳ささやま

病みつきも早いが飽きもまた早い　幸哉
住職のなんぎなことに釣に病み　与志
病みつきになる少年の瞳が光る　可住

病みついてベッドの下の妻哀れ　一盃
死ぬまでは病みつかぬよう神祈る　よし
病みついて散る花びらに窓を閉め　ゆう也
石臼のような腰して家守り　ひか平
腰でんと据えて米寿の盃を受け　越山
浮腰へ気付かずしゃべる話好き　つや子
弱腰へ北方領土取り合わず　宗珠
腰まわり気にして今日は旅の人　一声
友情を踏み台にして人になり　桂月
友情が誤解を招く倦怠期　文平
友情は必ず一升提げて来る　百合子
友情って不思議に失言残らない　靖子

東大阪川柳同好会　三十四報

順々に村を離れて過疎進む　誓二
行列の順を破った里眼鏡　三十四
順を待つ時間程には診てくれず　良京
ふし穴を覗く順番待っている　度
成功にしてはみみちい寄附の額　慶三
停年という名で交代告げられる　弘生
長かった底辺の涙嘘のよう　益孝
眼でものを云う交代の水枕　柳伸
女高生私服に着かえさあデート　道子
私服訪問警察手帖も疑われ　弥山人
お巡りの私に職がつきまとい　喜風
制服をぬげば冒険したくなる　美子
ハネムーン金波銀波の船の旅　喜洸
きらきらと光る涙がものを云い　千代子
きらきらと妖しくドレス目を奪う　かずを
ダイヤキラキラ女心を狂わせる　綾女
覇者交代歴史はいつも繰り返す　文秋
虹の街硬貨きらきら光る水　芳川

やる気ある服がきらきらと語りかけ　鎮彦
水俣の魚きらきら浮いてくる　鬼遊

いずも川柳会　板垣草丘報

自由主義子供はみんな出てしまい　水煙
自由主義中に礼義のある家風　正子
それぞれの夢がはばたく五月晴　虎秋
五月晴貧しさなどは思うまい　文子
指名解雇された男に五月晴　鐘堂
苦労した叙勲の人生五月晴　忠治
買留めの早手廻わしに悔があり　軒太楼
とまどうて先手に出鼻くじかれる　榊原秀子
主賓から先にさされる苦い酒　梟人
のびのびと新芽怖さをまだ知らず　夢酔
痩地から出た芽は強く風に耐え　幸一
真ン中で母が回していた舞台　芙佐子
せせらぎもやがては海に続く音　多賀子
連綿と続く歴史の中に嘘　独仙
雑談の中へ本音を少しまぜ　可保留
ライバルは心のすきに先手打つ　きみえ
留守番が嫌で妻より先に出る　草丘
嫁にまだ自由にさせぬ台所　登美也
笑ったが腹の中から旗を振る　緑之助

川柳たけはら　森井菁居報

ついて来た仔犬のことで家がもめ　静水
初湯つかわせてばあちゃんほっとする　房子
若葉萌ゆきのうの夢を消すごとく　こうじ
疑えばきりなし桜散る道を　文晴
春に酔う花見の予定ない主婦で　笑子
奇蹟信じて遺書は書かぬことにする　菁居
ふきかたで音色がちがうドレミファソ　小三直美
お父さんになるというのにスランプよ　蘭幸

あざやかに女をだました蜃気楼　寛子
春愁の帯といたまま昨日今日　不朽
仔犬もらい受験家族の気が和み　敬子
子供らにネジを巻かれる年となり　かつ子
ボロボロの人生だって詩がある　節夫
妄想をつついて春の陽が沈む　鈍舟
だれがどう言おうと口笛出る若さ　一路
風下で妻子の笑い声を聞く　英詩
沈丁の香りに偲ぶ遠きひと　秀夫
金魚死す小鳥死す日の惜春よ　かつこ
駈け足で走りたい日もあった駄馬　一路
中学の校舎がお城のように見え　中一愛
姉ちゃんとおどりたくなる花リボン　小四紀

大田川柳会　藤田軒太楼報

栄え行く証し五月の鯉のぼり　きみえ
栄転と云うけど左遷の疑惑持つ　夢酔

佳句地10選（前月号から）

新岡　回天子　選

和解する電話へ丸い言葉撰る　吸江
せめてもの祈り瓦に名を記す　鬼遊
寿命の延びに見合うた職がない　草風
有終の美飾った妻にある涙　一念
自らに同情をして釣に出る　薫風
武器が要る平和を守る武器が要る　本蔭棒
早耳を売込む株屋の電話ベル　勝巳
古傷に触れてはならぬ話題よる　小松園
空論とけなす上司に策もなし　軒太楼
太陽を地に呼び寄せて草萌える　岩光

じれったい電話に鍋のたぎるお湯　可保留
菖蒲湯でゆっくり伸す肌の皺　雷音坊
旅の湯はお国訛りの花が咲く　早苗
思いすぎ解けて肩まで湯につかる　美浪
一日の偽装脱ぎ捨て湯に浸り　孝太郎
手を合す歳で意固地の角もとれ　煩脳児
手をつなぐ世界は円い児童年　多賀子
神だけが手相いいのを見てくれず　緑之助
縁談がくすぶる母の手八丁　ゆう子
手順よく運んで手術大成功　雀村
母の日の母に手加減するゲーム　三三男
納棺へ涙で亡母の手組合せ　軒太楼
手を挙げて園児法規をよく守り　水煙
永久の愛を誓った巣が揺れる　秀子
久々の声に受話器も汗をかき　長樹
幾久しく誓った愛を見つめ合い　虎秋
久し振り逢って不運も聞かされる　九二老

川上　大輪報

川柳しんぐう

反発はしても親子の深い愛　渓水
反発へあとのむなしさだけ残り　大輪
反発をしてから社長に認められ　冬花
負け犬となる反発も吠えてみる　まさ子
天ぷらと知っても私の宝物　英子
天ぷらになってもエビはエビの格　富子
天ぷらの順番札が腹鳴らし　勇太
天ぷらは温し愛しい妻が居る　千寿子
素うどんの味天ぷらで見失い　十郎
名作の仁王を泣かす排気ガス　利凡
名作と云う仏像は拝まない　雀踊子
名作の余韻乾いた心撫で　道子
半分は親の金ですマイホーム　緑楼
名作のヒロイン化身を見て飽かず　式
半分の余白あなたの彩を待つ　幸
半分も言葉にならずデートする　としよ
半分は私のものと家裁前　希久志
半分にわけるロマンの瞳がきれい　善太
公約を半分に聞き票を入れ　弘生
名作という肩書で売れている　与史

奥谷　弘朗報

倉吉打吹川柳会

甲子園女神皮肉で気紛れで　陸者
傷心のベンチの背に陽は無情　柳風
老いてゆく足より口が達者だよ　吉朗
長寿国老人福祉に泣く日本　独歩
皮肉ったつもりを笑顔で返される　秋女
デートして言訳あれこれ考える　みやび
熱い仲何処へ行くにも二人連れ　寿満湖
皮肉にもその盲点を突いてくる　夕路
やあやあと頭を痒いて遅刻する　石花菜
トラクターもぐらのんびりして居れず　俊子
常連で裏も表もよくわかり　笑王
道楽が人当りよい小父にする　弘生
甘すぎる嫁の手綱をはがゆがり　舎人
再婚に子連れどうしの厚い壁　御前
アリバイの崩れた後の不貞腐れ　佳女男
再婚にどちらも子連れ気をつかい　とめ子
議会とは言訳させて小股とる　寿朗
足ぶみを許さぬ老の下り坂　早苗
よく聞けば心の励みになる皮肉　弘朗

恒松　町紅報

川柳塔まつえ句会

乗りかえた窓に故郷の青田風　虎秋
泥足で心の奥を踏みにじる　みのる
決断の鈍さ足ぶみまだ続き　軒太楼
乗りかえも苦にはならない娘の新居　みつこ
生き甲斐は足と頭のハーモニー　愚童
カチワリの半分とける甲子園　快哉
乗りかえてローカル線の旅もよし　巡歩
乗りかえて翔んでみたきと思えども　るり子
乗りかえた社が倒産をした不運　舞吉
足音へ女の言うがままになり　新雪
省エネルギールック大臣が着ると話題になる　鶴丸
乗りかえるうまさを政治家養われ　孤呂二
赤軍のさても気になるエネルギー　登美也
ナポレオン氷に溶けて座がはずみ　町紅

児島与呂志報

川柳大阪

生涯に一度の主役棺に寝る　本蔭棒
坂のある駅で女とジュース罐　笑風
反抗の口火主役になっていた　天樹
肩書は気にせず同じ釜のめし　比呂志
善意の言皮肉にもとる嫁姑　弘生
定年へたった一度の主役泣き　雅巣
皮肉にもヘッチャママのイヤリング　三十四
陽炎に女の線の艶めいて　洛酔
オクターブ上げ奥様の叱る声　真佐志
カプセルに下駄も入って一千年　秀峰
鈴の鳴る下駄が鳥居を蹴っている　敏
一年生初登校の自慢顔　高秋
本心の透ける皮肉がこそばゆい　六竜子
さっきまで社長が履いてた宿の下駄　道子
一サクラ二城三橋通り抜け　佳加志
地図通りのつもり地下街又迷い　重人
人生の坂突き放す愛もあり　希久志
地図にないポストがこんなとこにあり　胡蝶
花暦桜四月の通り抜け　与呂志

堺川柳会（菖蒲句会）　河内　天笑報

嬉しい言葉何度も聞いた散歩道　美乙女
寝たきりで毒舌だけはまだ叩き　邦晴
花のある方へ向いてく散歩道　宏子
うしろからいたわる傘が追ってくる　清女
紫に少し背いた花菖蒲　笑痴
体調がよいので毒舌冴えてくる　天笑
云いにくい話はそっと窓に立ち　摩天郎
雨の企み真赤な傘を買う　千万子
紫の酒に人妻ゆれている　つき子
毒舌のラッパは短い方がよい　酔々
菖蒲園昨夜の雨で花が咲き　東雲
零メートル地帯に住んでこわい雨　与一
菖蒲から落ちる雫は紫で　育園
病窓を桜前線通りすぎ　ミツエ
善人のマスクに変えた大鳥居　翠公
水割りのあとは散歩に出たらしい　柳伸
雨に濡れても野仏は立ち給い　誓二
父の日の散歩は早い目に帰る　小松園
菖蒲園歩くと花の顔になり　千代三
いま犬と妻に頼っている散歩　一二三
コンコンさん鳥居の前でかしこまり　川狂子
寄進した社名も入れた大鳥居　正和
干し物へ梅雨空ちょっと拝んどき　幸子
カラフルな雨具揃えて梅雨を待つ　登志子

南大阪川柳会　中川　滋雀報

目の無い奴ばかりと失格は思い　恒明
恍惚の人の勲章なお光り　君子
失格の隣りに落ちて居た栄冠　弘生
三浪という失格の箔がつき　千代三
隅っこのコラム明日の思想もつ　好郎
妻一言コラムの様な苦言はく　あいき
あたたかいコラムに朝のパンがはね　憲祐
反論へまた反論をするコラム　雅風
片道になってコラムにある余韻　喜風
台本にない一生を追うピエロ　柳伸
台本へ余生のページあけておく　滋雀
神の書く台本にある天災か　柳宏子
手作りのよさスケールは小さくとも　文秋
ワンダフル大仏様は超然と　酔々
ほらふきのスケール換算表が要り　度
春眠へせめて水音細くする　久子
春眠がタイムカードへ走らせる　勝美
目移りをしてはならない妻子居る　綾女
あれこれと目移り夢に薹が立ち　頂留子
あれこれと目移り手垢つけただけ　蘭

城北川柳会　弘生報

石段の下でじゃんけん負けつづけ　鬼遊
歩道橋いつも不平を聞くばかり　満津子
支払いに来た階段の軽い足　道子
石階段　成仏出来る程へこみ　弘生
階段を上りつめたら街がある　ふみ
階段の手すり仲よく歳をとる　なりこ
階段で新入社員に追い越され　秀村
階段をななめに上る細い足　テルミ
階段の半ばで電話のベルが止み　玉子
平のまま社員階段上りつめ　タキ
ぽつぽつと階段上って神参り　きくみ
ハイヒール階段用でないらしい　行有
階段を一気に上るのも若さ　一休
喜びの階段　花嫁踏みしめる　炉斉
階段へ同行二人の杖をつく　喜代子
祖母の守り歯止め歯止めが多すぎる　千子
七十の手習い老化に歯止めかけ　ますえ
防災用非常階段　錠が錆び　恵美子
階段の一段ずつにある歓喜　としよ

川柳化粧櫓　植村客遊子報

酔っているふりで小言を二ツ三ツ　岳詩
随筆の句切で湯呑みに手をつける　秋月
畦だけを残して村のアスファルト　実男
つまずいた石には責任負わすまい　奮水
人世を閉じる枯木のような祖父　越山
赤旗を振る手でゴルフのクラブ振る　紅月
おしゃべりに女の見栄がわたり合い　葉香
深山路の一輪の花口づける　永楽
好きですが言葉にならずお茶二ツ　客遊子

南海電鉄川柳会（大阪市）辻　圭水報

盛り場に一茶の石も追いやられ　摩天郎

盛り場も学校休みと云う姿　圭水
盛り場で住所不定が漁るごみ　雅風
盛り場で人間模様を見て歩き　清女
盛り場に学校がある泣きどころ　千代三
盛り場で日銭をかせぐなれのはて　宏子
盛り場へある日のスリは家族づれ　千万子
味気なき盛り場今日は無一文　与一
盛り場は鬼門やくざに凄まれる　誓二
行くあてがなく盛り場へ足が向き　美乙女
盛り場へ心の憂さを捨てかえり　ミツエ
盛り場の臭そのままのせて乗り　昭月
盛り場に男のエゴが落ちている　柳伸
電話戦術うまい話も落し穴　川狂子
落し穴へ父の助言で落ちずすみ　綾女

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

丸めこむつもりが丸めこまれてる　秀川
炎天下帽子の円も広くなり　幸坊
退院の青空再起の血が騒ぎ　登
私学にはこれだと指を丸める子　一扇
湯舟から天井の蜘蛛と睨みあい　栄
打明けた心に青い空がある
チョコンと芽頭を出して春つげる　野生
床低く軒の低さに蜘蛛と住み　安竹
木の枝で払った蜘蛛がついて来た　聖地
丸顔の小っちゃい鼻が憎めない　雅洋
ブランコが大きく揺れる青い空　亜也子
四角にも丸くもなれる心持ち　亜成
青空の雲は汚点となりはせぬ　みどり
竹の子の意気土を分けて伸び　一念
冬眠の蜘蛛掃除機に吸い込まれ　博泉
しゃぼん玉はかなく消えるくもの夢　千夢

青空も知らずカーテン引いたまま　形水
恢復の視野いっぱい丸く見え　弥生
ゴキブリも蜘蛛も同じ穴へ逃げ　入仙
右派と左派丸い地球を尖らせる　好郎

三井ヶ丘川柳会　高田　博泉報

舞台裏根回しすんで虹がでる　明
根回しのやっぱり年期が物を言い　隆子
根回しのあとは採決あるばかり　よしひろ
金魚糞そんな仲間も仲にいる　勝美
隣席へザブトン抱いて仲間入り　虎
サユリスト仲間も十年巾が出来　恵美子
私より仲間が良いのと妻不服　右近
根回しに老婆の知恵が生きていた　弘生
根回しが効いてはんこをやっと押し　三郎
みどりみどりみどりに沈む山の寺　光夫
落ちぶれた仲間の壺は覗かない　一念
仲間内負けまいとする鳩がいる　江留美
方言の仲間が恋しい時もあり　琴音
教育ママ遊び仲間へソッポ向く　てまり
田園の車窓ポカリポカリと陽があたる　亜成
強がりのいつのまにやらそうなって　博泉
どん底にいてどん底の仲間寄る　度
裏切らぬ仲間にしぼれば誰もいず　新之助
仲間からこぼれてひとり貯めている　小路
足ひっぱった奴仲間の顔してた　恒明
男など根回しすればみな獣　亜鈍
煮ても炊いても償いきれないまま生きて　古方
もう逢えぬ人なら思いきり手を振ろう　野生
根回しの効果が薄い特級酒　三千子
仲間やからホントにホント腹が立つ　凡九郎

駒つなぎ川柳会　里　小路報

祝福を受けてふたりは旅に出る　みずほ
純真なふたりへ都会の場所がない　雅風
先輩も後輩もない美味い酒　千代三
一人ずつ違う運命持つ双生子　規不風
余生わずか今更禁酒などしない　潔
パパ禁酒機嫌の悪い日が続き　柳宏子
真実の恋の予報はバラ色に　宏子
禁酒する記念に今夜飲みまひょか　石捨
もう降っているのに雨は午後という　恭太
またしてもそれ見なはれになる予報　恒明
主婦として生きねばならぬ束ね髪　桐下
しあわせな構図茶柱主婦に立つ　酔々
予報はずれ人も弁当もひどう濡れ　美乙女
職業欄疑問持ちつつ主婦と書く　綾女
後輩へおしえられてばかり居る　凡九郎
十年目主婦もあぐらをかきはじめ　勝美
初恋がちらつく儘の若い主婦　小松園
妻が居てくれる影絵を信じよう　雀踊子
ぐち云わぬ主婦にエプロン白すぎる　柳伸
後輩へゆずるユニホームを洗う　小路

川柳高知　川竹　松風報

同伴は兄にしておく腹づもり　麗子
言い逃れさせぬ切札持ってゆく　海州
生欠伸して受付の春うらら　窓花
保育器で一人前にする欠伸　白水
望むなら太郎であって欲しい孫　三吉
カクテルへ悲しい嘘がゆれている　菊野
善人にタイムカードの裏表　恭一
分娩室の扉よ男は弱き者　泰章
歳月が燃えない色にしてしまい　節子
ねぶか汁一家不足もない暮し　登

自殺などせぬ児に育てよ鯉幟　よしみ
週休も机上プランで終り告げ　克子
居眠りをしていて父の地獄耳　朱坊
居眠りの子感助手席話かけ　青果
居眠りも日課終点までのバス　桂緑
親切な相合傘をひやかされ　古城
口裏を合せていたに逃げ切れず　秋翠
言い逃れしている視線の定まらず　美江
仮面今日要らない人に会う笑顔　松風

川柳後楽（岡山市）　井上柳五郎報

お荷物になるが私の気持です　昌吾
駅までは母が背負うて来た荷物　定平
子を訪う日母あれこれと荷がふくれ　胡風
お荷物になって老人ホーム行き　九坡
もたされた荷物やたら重くなり　恒洋
ボーナスで買った荷物は軽く提げ　住治

廉

判一つ重い荷物背負され　草風
せっかちの時計ぐるぐるよくまわり　ひろし
塗りたてへせっかち一寸さわってみ　佐加恵
せっかちで世話がかえって裏目に出　元一
泣き言へとうとう親類中が集り　幽谷
目配せして泣き言聴いている　たけ志
泣き言は云わず詰腹切る覚悟　哲郎
泣き言に聞えますかと居直られ　柳五郎
泣き言を言わぬ男に男惚れ　梁太
家中を取り巻く音に馴れてくる　久米雄
新婚の隣の音はみな甘く　正道
事故の音腹に響くようこたえ　照路
負け犬の足音さびしい音を出し　夏彦
気骨心打てば男の音がする　宏大
歯の音を鳴らし入歯まくしたて　博友
今日の音引っぱってゆく終列車　秋月

和歌山七面句会　中筋三幸報

屋号まだ残る実家の村貧し　周穂
大切な人故愛を告げぬまま　宣子
施設の子愛には触れず口とざす　二咲子
実家には必ず寄ると目星つけ　朱三子
わがままな娘にかえる実家がえり　昌三郎
人生の大波小波なんのその　秀雄
名前だけ甥が継いでる里の家　知也
デスマスク波乱万丈終りける　富子
実家の味いつしかよその味となり　葉津子
夫婦げんか実家でまつ一週間　五穂
好調の波と見えたは他人だけ　フクヨ
実家のない嫁でしっかと根をおろし　晶子
久びさに集えば実家生気満つ　晃
実家の母九十歳と言う自慢　勇次
実家より栗の花咲く便りあり　わか
生々流転波はきのうの音でない　幸
ネオン街蝶のごとくに愛が舞う　宏
零落な笑顔の蔭の愛をみし　和美
実家より父が届けし葱の束　世津
波しぶき浴びてコマーシャルもう真夏　隆恵
波に乗って恩義の谷を振りむかず　涼子
愛情のいきつくところ空虚なり　三幸

勝山双葉川柳会　河野君子報

振り上げた腕に怒りと愛がある　英子
うっとりと星と語ろう露天風呂　利代
孫を抱く腕の痛みは言わずおく　久子
うっかりと言った言葉に縛られる　田鶴子
貴男の腕に妻子の命預けます　千里
老夫婦互いの腕をたよりにし　祐子
母と子が少しあらたまるカーネーション　千代子
立話うっかり噂さの花咲かせ　緋沙子
うっかりと捨てれば孫の宝物　静香
母の味ゆずって嫁がほめられる　千世子
風はみどりうっとり愛を考える　節子
うっとりと明日を忘れる花の下　智子
たんぽぽの軽さで載った口車　君子

堺市農協つため川柳会　南川昌水報

成人式我が娘へ結ぶ帯の幸　登志子
神詣で初の和服の蝶結び　幸子
風呂敷の結び目足らぬ里帰り　ミツヱ
結ばれた細い糸だがままならず　昌水
結び上げた娘の晴れ姿へ父無言　維久子
心中沙汰までして結ばれすぐ別れ　美乙女
結ばれた二人だ道は遠くとも　宏子
結ばれて妻のみ撮す旅もどり　摩天郎

虹川柳倶楽部（唐津市）新岡回天子報

零一つ取っても値札に近よれず　実
一台のテレビ家族の多過ぎる　岩光
揺籃と墓石をつなぐ愛と欲　勝一
黒になり灰色になり飛行霧　久仁於
修業僧易者のように髭を撫で　義美
往きは晴帰りは雨の旅に出る　畑中
電話機のむこうもナイター聞いている　六連星
親の票もったいないと子に継がせ　今日野一竿
台風に遠く住む娘の空思い　嵌
ハト派なら三枝の礼をわきまえる　掬治
老兵は消え去るのみと我も知る　虹汀
子探しに迷い燕の十来往　回天子
五十坪有れば建てたい二階借り

本社八月句会

日時　八月七日（火）午後六時
会場　金属会館
南区鰻谷東之町10番地
地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ
電話　271・3935番
柳話　戸田古方（今月の出題・香川酔々）
兼題「定規」中川滋雀選
「灯油」高杉鬼遊選
「橋渡し」岩本雀踊子選
「形式」大坂形水選
席題　二題　当日発表　各題三句以内厳守
会費　三百円
★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

9月の兼題　「黒板」「据え置き」「効用」「逆コース」

本社句会・9月7日6時から

暑中お見舞い申しあげます

川柳塔社　常任理事一同
同　参事一同
同　理事一同
同　運営部一同
同　句会部一同
同　編集部一同

●募集●

十月号発表（8月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「往復ハガキ」錦織文子選
「秋の空」藤岡花梢選
「原子力」福田丁路選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十一月号発表（9月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）橘高薫風選
課題吟（各題5句以内）
「教育」藤原桜山選
「皆勤」川口弘生選
「霜」藤井明朗選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

常任理事会は8月2日 5時から

定価　四百円（送料29円）
半年分　二千五百円（送料共）
一年分　四千八百円（送料共）
昭和五十四年七月二十五日印刷
昭和五十四年八月一日発行
大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
編集兼発行人　中島蓬太郎
印刷所　藤原童心社
〒542　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地
発行所　川柳塔社
電話　大阪・二七一—三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番
普通預金口座番号・一〇二七八三

・ペンペン草・

暑中お見舞い申しあげます。

★本号を送り出すとスグ新年号が来る。八月号から新年号までもアッというまである。雑誌や新聞にも〝遊び〟が必要だが〝省エネ〟ではないけどページに制限があり、ここんとこ〝遊び〟には手も足も出ない。

今年もあと4冊

★児島与呂志さんの〝地下鉄〟と若本多久志氏の「続・老いの坂」。そこへ橘高薫風氏の川柳全集「麻生路郎」。川柳には関係ないが島居百酒氏の比島戦線従軍回顧録「白い歯」と、実に本年は出版花ざかりというところ。とくに「地下鉄」は発刊いらい一か月で限定五百部が売り切れという新記録を作った。

同人の刊行4冊

★ことしの夏は長いのではないかとおもう。省エネルギーとやらで冷房を抑える

ながーい夏

という。戦後の餓えと暑さに耐えてきた国民だが、贅沢に慣れきっている今日、どの程度まで辛抱が出来るかナ。神戸では開け放たれた法廷の窓から犯人が逃げた。共犯は〝省エネ〟だ。

★終戦直後、いまの暴走族と変わらぬ無茶をぼく自身もやってきた。めしを炊く薪木がないので、柵を盗んだりした。本もカマドにほりこんだ。今でも惜しいとおもうのは「キネマ旬報」だ。ただ一冊残したのは〝終刊号〟である。終刊号といえば雑誌「漫才」と共にぼくもこの方面の終刊号になってしまった。

★大坂形水氏や高鷲亜鈍氏の親友である内田克己氏の「大阪手帖」も氏の死去で廃刊になった。ぼくも一冊いただいたが〝サンェイ〟や〝読売〟では内田氏の功績を大きくたたえていた。ユニークな随筆雑誌だった

★暑さのせいではないが話がバラバラになった。話を終戦後にもどして、当時のすさんだぼくに、スカッとさわやか〔どこかのコマーシャルみたい〕にさせてくれたのが並木路子の〝リンゴの歌〟だった。つづいて洋画ではジョン・ウエインの〝黄色いリボン〟の主題歌だった。そのウエインが日本時間の六月十二日午前九時二十三分に亡くなり、彼の死を悼み各放送局ではおもい思いに彼の作品を放映した。その中で〝黄色いリボン〟がやはり群を抜いていたように思う。

★十何年か前に、ラジオで西部劇の主題歌を集めた歌謡番組を構成したことがある。やっぱり〝黄色いリボン〟が今だに耳に残っている。その台本の書き出しに無声映画時代のハリー・ケリーの「銀の十字架」や、ウイリアム・S・ハートの「鬼火ロートン」などに触れ、フート・ギブソンにも登場させた。半世紀以上の話で申しわけないが、これらの俳優は西部劇のルーツといってもよいのではないか。（〝黄色いリボン〟の二枚目の中尉役はハリー・ケリージュニアである）クーパーは〝俳句〟的で、ウエインは〝川柳〟的だと思うのだが、どうでしょうか。クーパーの「ボク」ウエインの「オレ」が、そう思わせるのかも知れない。

★暑いですなア。

（不二田一三夫）

▼菓子コーナー

▼食欲の進まぬ暑いさなか、年齢とともに好物も変わります。子供の頃は煮炊きする香りがしただけでガッカリしたものですが、昨今は野菜が続いてもいっこうに気にならなくなりました。

▼三十度近い毎日、冷やしたソウメンをつるりと喉に通すのは格別です。

▼大和の三輪が発祥の地河内、播州、小豆島などに広がったとされる。

▼糸のように細く、雪のように白く、厳寒に干される風景もソウメンの涼感に繋がるようです。

カッケ（脚気）／肉体疲労時のビタミンB1補給に
アリナミンA
☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも
☆アリナミンA25ミリ錠のほかに5ミリ錠
タケダ

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和五十四年七月二十五日印刷
昭和五十四年八月一日発行（毎月一日発行）

川柳塔・八月号

四百円（送料・本号に限り三十三円）

暑中お見舞申し上げます

電波新聞社

東京本社
東京都品川区五反田二丁目一一一五
大阪本社
大阪市北区中ノ島三—三（朝日新聞ビル内）

投稿欄案内

川柳　選者　橘高薫風
（掲載日）毎週水・土曜日

俳句　選者　小寺正三
（掲載日）毎週火・金曜日

短歌　選者　佐々木信夫
（掲載日）毎週月・木曜日

※優秀句には掲載紙をお送り致します。

〈投稿規定〉はがき一枚に三句（首）以内・自由課題。
〈投稿先〉〒530 大阪市北区中ノ島三—三（朝日新聞ビル内）電波新聞大阪本社学芸部あて。
（川柳・俳句・短歌を明示）

つめたさに、おいしさをそえて……

アイスキャンデー

あずき・チョコ・ミルク・パイン

高島屋　そごう　松坂屋　阪神　ドージマ店
近鉄（アベノ・上六・奈良・東大阪各店）
京阪モール　なんば新川店　虹のまち鹿鳴
中之島サン・ストア　淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店

TEL (641) 0551

雑誌 05703—8